
クロス・ローズ

霜月 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス・ローズ

【NZコード】

N97480

【作者名】

霜月 雪

【あらすじ】

悪魔 。人の憎しみ、恨みにつけ込み、契約し、殺人を繰り返す生きもの。

そんな悪魔を倒せる唯一の存在が、エクソシストである。

アルディラルド教会エクソシストの、リルディウス・ローズとレンレット・アルス、二人は良き相棒で、お互いを一番に信頼している。

第一章・あらすじ

数少ない女工クソシスト、リルとその相棒、レインは、ルエルでおりていて、ある事件を捜査することになった。

なんでも、ルエルで評判の美女が被害者らしい。次の被害者と予想される貴族の所へ、二人は護衛として行く。

しかし、その貴族は家庭内事情が少々複雑だった。一人は無事悪魔を退治することができるのか！？

恋愛ファンタジー！

プロローグ（前書き）

恋愛ファンタジーものです。
なんだか恋愛しか書いてないきがします・・・。

プロローグ

悪魔、とは、人の**膨大**^{ぼうだい}な恨み、憎しみにつけ込んで契約をもちこみ、身体をのつとつて殺人を繰り返す生きものだ。

その身体能力は人をこえ、とてもたちうちできなかつた。憎しみが強いほど、強い上級悪魔が契約していた。契約期間が長いと、人の身体がもたなくなり、死に絶える。そして悪魔はまた、新しい契約主を捜すのだ。

そんな悪魔を倒せる、唯一の存在が、『エクソシスト』。

彼らは、悪魔と同等の身体能力を持った者たちで構成され、科学者が開発した『対悪魔専用銃』を使い、悪魔を倒していった。契約期間が短い、まだそこまで身体を蝕まれていないものは、銃にうたれると正気に戻つた。契約期間が長い者たちは皆、銃にうたれ悪魔が死ぬと灰となつた。

そして、各国に、『教会』ができた。教会は、教皇から初め、大司教、司教、エクソシスト、神官たちで構成される。エクソシストは司教と同じ地位をもらい、国民を悪魔から護つていった。

「さあつてとーさつあと終わらせますか

ぱんと服の埃をはらい、少女は暗闇の中、にこりと微笑んだ。

深夜3時。ほとんどの者達が寝ている時刻に、一いつの影が。

片方は40代にさしかかるであろう男性で、目は見開かれ、上質な布でできた、貴族が着ている服には赤黒いものがこびりついていた。息は荒く、手には同じく赤黒いものがついた刃物 ナイフが握りしめられている。その足の速さは普通の男性にしてはあり得ない速度だ。

もう片方は、漆黒のフード付きのコートをその身にまとい、フードからこぼれる長い髪は金色をしていた。風に遊ばれているその髪は、月光をあびて美しく光っていた。

「ちっ・・・」

小さく舌打ちして、その人物は手に握られている漆黒の銃を男に向けた。

そして、引き金を引く。銃声が静かな夜の街に響いた。男は撃たれた右肩をおさえ、低いうめき声を上げる。その傷口には、魔法陣がうつすらと浮き出ていた。

「クソエクソシストが・・・・・っ」

男は小柄な影をにらみ詰めて、うなつた。すると相手は慣れているのか、クスリと笑う。

「ほら、さつさと觀念しなさい?」

わざとらしく肩をすくめて、人物 声音からして少女は銃を

男に見せびらかすように軽く振る。

その銃を男は忌々しげに見つめ、そして少女を見て嘲笑を浮かべた。

「たかが人間が・・・あまり図に乗るなよ。所詮は我々に殺される運命だ・・・」

楽しそうに醜い笑みを浮かべ、男はナイフを握りしめ、それを力強く少女に向かつて投げつけた。そのナイフを少女の額に勢いよく刺さる　　寸前に、少女は腰にさしてあつた銅色の銃を構え、うつ。

すると、銃口から魔法陣が現れ、ナイフをはじく。

男は目を見開いた。少女は楽しそうに笑う。

「さつすがルウ爺！じゃ、次はこれね・・

そういうて、少女は銅の銃を戻すと、今度は銀の銃を構える。その銃先はまっすぐ男に向いていて。

「・・・・・あ・・・・」

男は見事に顔を引きつらせる。

少女はためらいもなく銃の引き金を引いた。

「主神ゼウスの名のもとに、悪の禍々しき魂を救済しますー！」

普通の銃声より、数倍でかい銃声　　というより破壊音が、夜空に響いた。

「で、結果がこれ　　ということか？」

20代半ばの男性が、頬を引きつらせながらある場所を指さす。そこには無惨に半壊している建物が風にうたれていた。

男の前に不機嫌そうな顔をして座っているのは、10代後半の少

女だ。たっぷりとした金の長い髪に、白い肌。そして大きな青の瞳はまっすぐ前を向いていて、強い意志が宿っている。

その隣に、少女とは対象に行儀良く座っているのは、少女と同じくらいと年頃の少年だった。漆黒の髪に白い肌、紫の瞳。顔立ちは整っていて、その顔は苦笑を滲ませていた。

「そうよ。悪かったわねー」

「もつと誠意を込めて謝れ！まったく貴様はいつも・・・つ」

「あーはいはい！わるー『ござんした！私も別に好きで壊してる訳じゃないわよ！文句はルウ爺に言つてよ！』

「また自分を棚上げして・・・！だいたい、貴様が断ればいいだけの話だろうが！」

「別にいいでしょ！？私の『実験』のおかげで新しい武器ができるんだから！第一、壊してるのだつて、人気のない小さい建物よ！怪我人死人一人も出てないんでしょう！？」

少女は立ち上がり、そう怒鳴ると、また椅子にどすんと座った。男は額に青筋をたてながらも、少女をにらむ。

そんな二人の間に先ほどまで座っていた少年が入った。

「ま・・まあまあ、落ち着いてください。一人とも・・・ほら、リル、そんな仏頂面しない」

眉間にしわを刻み、睨んでいる少女、リルにこれほどまで軽く注意できる人間はそういないだろ？。リルはちらりと少年、相棒を見ると、立ち上がった。

「わーかつたわよ。けどレイン、私だってはじめは反省してたのよ？なのにそれを聞こうとしないで怒鳴り散らしてきたのは、あっちにいる20代のくせに親父くさいこという男のほうよ！」

「リル・・・さすがにそれは失礼だから。しかもはじめはって、今は反省していないの？」

少し冷たい声になつた相棒、レインにリルは顔を引きつらせる。

「や・・・今も反省してるわよ？それはもう、ものす、ぐ・・・」

「やう・・・なら気をつけてね。もう教会のほうにも知らされてる

だろ？から。これからリゼルグ司教からの説教も待ってるよ」

「・・・・・」

歩く女性すべてが振り返りそつた微笑を浮かべて、レインは黒い内容をさらりと口にした。リルは思いつきり顔を引きつらせて、肩を落とす。

「あーあ・・・最悪・・・」

「恨むなら、毎回任務先で建物壊す自身を恨んでね。リル」

思わず両手で顔を覆つリルの頭を優しくぽんと撫でて、レインは苦笑した。

そして一人は教会に戻るべく、歩き出す。背後から警官の「処理手伝えーーー！」という叫びを聞き流しつつ。

リルは、苦虫を数匹かみつぶしたような顔をして、ある扉の前にいた。リルと後ろには、苦笑しているレインの姿が。そんな一人を見かけた神官たちは慣れているのかちらりと見てその場を去つていぐだけだ。

リルは数回深呼吸して、扉をノックした。すると中から男性の声が返つてくる。それを聞き、リルは余計苦々しい顔をした。

「なんでいるのよ・・・！」

小さく呴かれた言葉はレインにも聞き取れなかつたようだ。リルは扉を引いた。

そこには、木材でつくるられた机と、一人の男性がいた。

橙色の髪に、同色の瞳をしている。

その人物こそ、リルが今もつとも会いたくなかった人物、リゼルグ司教である。

「リルデイウス・ローズ……またお前は……！」

20代にさしかかるであろう若い司教の顔は怒りに染め上げられていた。自分に向けられているわけではないのに、レインは無意識に視線をそらす。

リルは最悪、といった顔でリゼルグを見ていた。

第一章 1（後書き）

改装しいています。

前回とは結構話の内容が変更され、キャラの性格も違つてきます。

リルとレインが所属している教会は、アルティラルド教会だ。北の大國、アルティラルドは、一番はじめに悪魔の存在を知り、そして教会を立ち上げた国で、アルティラルド教会は、その国内だけでなく、西、東、南の教会でも『本部』と呼ばれている。ほかの国にも、アルティラルド教会のエクソシストが出張することもたまにあら。

今のところ、北も西も東も南もうまくやつていて、戦争の兆しはない。それが救いだ。

「またお前は・・！」

「痛い痛い痛い、いたいいいいいい！暴力で訴えるわよ！？クソ司教つ！」

「誰がクソ司教だ！上司になんて口の利き方だ！青二才！」

「青二才！？私、16よ！あんたと4つしか違わないわ。言葉も正しく使えないの？ばあああか！」

「ほお・・？何回いっても建物壊してかえつてくる学習能力のない小娘に言われても、痛くも痒くもないわ！教会破産はせんさせるきか！」

リゼルグは、リルの頬を力強く引っ張り、怒鳴った。リルも負けおらず、怒鳴る。部屋に罵声が飛び交うなか、レインは若干引き気味にリルとリゼルグの間に入った。

「ま・・まあまあ、リゼルグ司教、そこまでに・・・。リルも言い過ぎ。本当、毎回すみません」

「そう思うなら、このじやじや馬を止めてくれ、レインレット」

「無理です」

額に手をあてて、ため息をはくリゼルグの訴えに、レインは爽やかな笑顔で即答した。それにリゼルグの口が引きつる。

「・・・・・報告したし、私もう部屋に帰るわよ。すっごく眠い」リルは不機嫌そうな面持ちで、くるりと踵を返した。しかし、それをリゼルグは止める。

「まで。お前らには新しい任務が入っている」

「・・・・・」

リルはしばし沈黙した後、小さく舌打ちした。

「・・・ちつ」

「こら、聞こえてるぞ。仮にも聖職者が」「はいはい。で、任務内容は？」

おどけてリルはリゼルグを見る。リゼルグは一つ息を吐くと、口を重々しく開いた。

「北の街、ルエルで、連續殺人事件が起こっている」

ルエルでの連續殺人事件の被害者の共通点は、皆、街で有名な『美女』達だつた。有名な美女は6人。そのうち、4人が既に殺されている。その殺され方は、顔をナイフで何十回も刺され、腹

子宮のあるあたりの場所をそれ以上に刺されていた。リルとレインはその写真を見たが、とても直視できる代物ではなかつた。思わず、二人とも写真から顔を背ける。

「・・・で、私たちは残り2人の護衛をしろ、と？」

「そうだ。その2人が姉妹でな。一人も聞いたことあるだろうが、あの『ローサルド』家の長女と次女だ」

「・・・ローサルド・・・。上級貴族ね」

リルは嘲笑を浮かべ、吐き捨てるように言つ。

「2人殺された時点で、狙いは美女つてわかつてたはずでしょ？4人も殺された後に教会に連絡くるつてことは、2人が上級貴族だからつてわけ？」

リゼルグはリルをただ無言で見つめた。それが肯定と受け取つて、リルははつと乾いた笑みを浮かべた。

「あきれた・・・、これだから大人は嫌いなのよ」

いつもとは違うリルと様子に、リゼルグは少し困惑した様子だ。レインは苦々しい顔をして、リルの頭に手を置いた。

「リルディウス」

いつもは愛称で呼ぶレインが、本名のほうを呼ぶことで、リルは我に返つたように、気まずそうに顔をふせた。

「すみませんでした」

リルは一言そう言つと、踵を返して今度こそ部屋から出た。レインもリゼルグに一礼すると、去つていく。

それを、リゼルグはただ見送つていた。

教会には、エクソシストの個室がある。いわば、学校の寮というやつだ。それぞれシャワー室もあり、洗面所もある。ないのは、台所だ。台所は、教会内にでかい食堂があるため、全員そこで食事をしている。

リルはシャワーをあびた後、ベットに倒れ込んだ。ふかふかのベットに体を埋め、安堵の息を吐く。

ふ、と木でできた素朴な机を見る。そこには、光を反射して輝く銀の十字架^{クロス}があった。エクソシストの証であるそれは、いつも身につけていなければならないものだ。

それを手にとり、リルは握りしめた。銀でつくられたそれに、ぬくもりなどあるはずもなく、手に感じる冷たさに、リルは安堵して微笑んだ。手から伝わる冷たさが気持ちいい。

リルはそのまま、いつのまにか規則正しい寝息を立てていた。

レインは、シャワー室から出ると、ベットに腰掛けた。肩にタオルをかけたまま、しつかり髪を拭いていないため、毛先から水が落ちる。それを目で追いながら、レインは髪をしつかり拭いた。

人心地ついたら、そのまま後ろに倒れる。背中にあたるベットの柔らかさに、息を吐いた。

そのまま布団をひっぱって、レインは瞼を閉じようとしたが、ふと机の上に無造作においてある十字架を見る。手にとつて、その心地よい冷たさに思わず微笑み、レインは意識を手放した。

翌朝。

リルは、未だ重たい瞼をこすり、ゆっくりとした動作で起きあがる。ぱちぱちと数回瞬きまばたきをすると、脳が完全に覚醒した。リルは寝起きが良いほうなのだ。髪をとかし、服を着替える。腰に銃をさし、リルは部屋を勢いよく出た。そして自分の隣にあるレインの部屋に、ためらいもなく入る。

へたしたらリルより綺麗に整頓された部屋のすみにおいてあるベッドに、相棒はすやすやと寝息を立てていた。リルはやつぱり、と苦笑すると、レインの体を揺さぶる。

「レインー、お起きー」

「んー・・・」

リルの手をふりほどくように布を深くかぶるレインに、リルはため息を一つ吐く。この相棒は昔から朝が弱いのだ。揺さぶる手に力を加え、リルはレインの耳元で怒鳴つた。

「起きるつーー！」

「リル・・・声でかい・・・」

少々寝癖ではねた頭に、いまだ眠そうな顔したレインは、弱々しくリルにいった。片手で怒鳴られたほうの耳をおさえ、リルを少し睨

む。しかし、その日はまだ眠氣で力がないため、リルは涼しい顔をしていられる。

「おきないあんたが悪いわよ」

しれ、とせう返す相棒に、レインは一つため息を吐くと、まだ寝ぼけている頭をむりやり覚醒するために洗面所へ向かう。

顔をタオルで拭き、リルを見る。前髪がまだ濡れていて、水が目をかすつて落ちた。リルはふう、と息を吐くと、苦笑して、レインの肩にかけてあるタオルで、髪を拭いてやる。驚いたよつこ、レインは目を見開いた。

「え・・・？」

「ぬれてたから。あんた、眠いといつもそうよね」

ほけほけと笑うリルに、レインはあっけにとられたような顔をした後、笑った。

リルとレインは、今食堂への廊下を早足で歩いていく。レインとリルの部屋から食堂へは、けつこうの距離がある。にしごう時、リルは心底教会の広さを恨むのだ。

食堂の扉が見え、リルとレインは足を少しゆるめる。そして、やけ

に大きい扉を開けた。

そのまま、まっすぐリルは料理をつくりている顔見知りのおばさんに声をかけた。

「一いつ

その一言ですぐ意味がわかつたのか、おばさんは苦笑して料理を作る手を進める。食事は皆一緒に、質素なものだ。

一方レインは、席確保をしていた。こちらに気づき、片手を軽くあげる。リルはそのまま、おばさんに手渡された食事をもつて、レインの元に行く。机に食事パン一つと、スープの乗つ正在のお盆を出した。

「じゃ、いただきます」

行儀良く両手を合わせ、小さく頭を下げ、リルとレインは朝食を口に運んだ。

野菜のはいった、栄養のあるスープを一口飲み、パンを一切れ口に放り込む。甘い味が口に広がった。

教会のパンが、普通一般人が食べるものより少し甘い。この味がリルは好きだ。

その時、食堂に甲高い女の声が響いた。

「あら！誰かと思ったら、あのリルディウス・ローズさんじゃありませんか！どうりでどこかで見たことがあるお顔だと思つてしまつたのよ」

嫌みつたらしい言葉を吐いているのは、リルとレインと同年代くらいの少女だった。少し灰のかかった黄色は暗いイメージを感じさせず、こちら、といつてもリルに対してだが、敵意むきだして見てくるその瞳はエメラルドを宿していた。

「こんにちわ、メリセリタ・アシユルさん。どこかで、と言つてはたけど、あなたとあつたのはつい一昨日のことですよね？その頭は

飾りですか」

メリセリタ・アシュル。リルとレインと同じ年で、数少ない女エクソシストでもある。

いつもより、明らかに容赦のないリルの物言いに、隣で座っているレインは冷や汗をかく。メリセリタはその言葉にかちんときたのか、顔を真っ赤にそめて、リルの指さした。

「な・・・なんて言葉遣いなの！？わたくしにむかって・・！」

「これはこれは、失礼いたしました。アシュル様、私になにかご用があるのでですか？なら手短にお願いします。これから任務がありますので」

かつて無いほど綺麗に微笑みながら、リルはメリセリタと対峙するかつこうとなつた。メリセリタは歯ぎしりをすると、ばんと机を強くたたいた。近くにいた神官が眉を寄せるが、メリセリタとリル、レインをみて状況を理解したらしい、何食わぬ顔で食事を再開した。

「いいことー？わたしのレイン様が、あなたのせいで迷惑してるのでよ！毎回毎回なにか壊して帰ってきて・・！」

「あなたがレインレット様のことをどう想つているか、よおーくわかりましたから、私にちょっとかいかけないでください。それこそ迷惑です」

「な・・・なんですってえ！？」

メリセリタは、レインのことが好きなのだ。だから必死にレインにアピールし、共にいたいと想うのは勝手だが、それに自分を巻き込まないでほしい、というのがリルの本音である。大本の原因であるレインは二人の間で、苦笑している。そもそもレインはメリセリタが自分に向けてくる想いさえ気づいていないのだ。

「メリセリタさん・・・。このぐらいにしといでくださいませんか？俺とリル、これから本当に任務なので・・・。すみません。・・・。

リル、その口調やめて。聞いて寒気がする。すつゝく
最後の言葉はリルにだけ聞こえるように耳元で囁く。それに、リル
は眉を寄せるとそっぽを向いた。その一連の様子に、メリセリタは
悔しさに顔を赤くして、リルをにらみつける。

「それでは、もう一度と会わないよつて神に願っていますよ。アシ
ユル様」

リルは爽やかな笑顔で刺々しい言葉を吐き捨て、残っていたパンと
スープを食べると、その場を後にする。その背を、レインがあわて
て追いかけた。

「リル・・・そのしゃべり方やめてつて・・
「なにをおっしゃいますの?レインレット様」
リルの敬語口調はその後、數十分ほど続いた。

「ルウ 爺、いるー？」

教会の敷地内にある、古ぼけた棟とうの腐りかけた扉を、リルは数回ノックし、声を張り上げた。

返事がないのを承知で、リルは一つ息をはくと、扉に手をかけた。不愉快な音をたててあいた扉をしめて、リルは見慣れた室内を見渡す。

なにをどうしたら、ここまで、と思ひほど、室内はひどい有様だ。まず、歩けるスペースがない。床にこれでもかと積み重なった紙たち。それには、リルには解読不可能な式が綴られてある。床に錯乱されたビーカーや試験管。机の上には、氣味の悪い色をした液体のはいつたビーカーが煙りをふいている。

「ルウ 爺？」

それに怖じけず、リルは起用に紙じしの隙間にからつじてある床を踏み、室内を散策する。

すると、ゆらりと漆黒が揺れた。

「おお・・・リルディウスか・・・」

そこには、80代ぐらいの、老人がたつていた。もはや白しかない髪と髭は無造作に伸び、着ている服はよれよれで、薄汚れている。

この老人こそ、教会お抱えの天才科学者、ルウアビス・イーザである。

対悪魔銃を始めに開発したのが、彼の曾祖父らしい。イーザ一族は皆、教会で対悪魔銃を開発している。彼も例外ではなく、その天才的な脳で、数々の銃を開発しているのだ。

リルにはただの食えない狸爺にしか見えないが。

「それで？あの銃はビービーじゃつたかの？」

「結界銃は良かつたわよ。でも、もう一つのほうは駄目ね。撃つたときの反動で、隙ができるし、威力がありすぎて、また建物壊しちやつたわ」

軽いノリでそう言つ少女に、老人は楽しげに笑つた。

「そうか、そうか。それは良い

「なにが良いんだ。この狸爺！」

額に青筋を浮かべながら、リルは低く呟く。

「あのねえ・・・。実験して、私があのクソ男・・・じゃなかつたクソ司教に怒られるのよ！？」

「じゃが、実験はやめんのだろ？？」

「・・・そりゃあ、それで戦力になるし・・・

気まずそうにそっぽをむくリルに、ルウアビスは優しげな瞳を向ける。

「でも・・・あの、クソ司教と警官、頭いなしに怒鳴つて

「

「やつぱりここにいた」

リルの声に被さつて、青年の声がする。それに、リルは目に見えて固まつた。おそるおそる背後を振り返ると、そこには見慣れた相棒の姿が。ほ、と安堵の息をはいて、リルはレインに向き直る。

「よかつたあ・・・。あいつかと思った。まったく、齧かさないでよ。レイン」

「なんで俺は怒られてるのかな？・・・まあいいや。リル、そろそろ任務いくよ」

レインは苦笑して、リルを促した。リルはそれにうなずき、ルウアビスのほうを見る。

「今日はなにか新作ある？」

「おお・・あるで。ほれ」

リルは実験した試作品を机の上において、ルウアビスに問うた。ルウアビスはどこから出したのか、漆黒の銃をリルの手にのした。

「ん。じゃ、いつてくるわね」

「おお。いつてらっしゃい。リルティウス」

優しげに微笑むルウアビスに笑い返し、リルとレインは棟から出て行く。

「本当に、似ているのぉ・・」

ルウアビスは小さい声でそう呟くと、リルとレインが先ほどまでいたところを見つめた。

リルとレインは、馬車に乗り込むと、任務資料を読み始めた。といつてもレインは昨日のうちに田を通していたが。

「ルエルまで・・・40分くらいか」

リルは呟くと、背もたれにもたれかかった。そして、そのまま船をこぎはじめる。眠そうに目をこするリルに、レインは苦笑すると、寝てもいいよ、と言つた。

「・・・ん・・じや、ついたら起こして」

そう言つやいなや、リルは眠りの世界に入る。

規則正しい寝息をたてはじめたリルは、ずるり、とレインにもたれかかつた。レインはそれに驚いたように田を見張つたが、次にはほえみ、リルの柔らかい髪を撫でた。

肩を強く揺さぶられたような気がして、リルは重い瞼を開けた。そこには、見慣れた相棒の顔がある。

「リル？ 起きて、ついたよ」

「・・ん・・うー・・」

瞼をこすって、リルは起きあがつた。だいぶ寝ていたのか、少々身体のありこちが痛い。

思わず眉を寄せるリルに、レインは苦笑して頭を撫でた。

馬車から降りると、ぬるい風が頬をかすめた。リルの長い髪が、風に遊ばれて翻る。

鬱陶しげに髪を後ろに払い、リルとレインは屋敷のチャイムを鳴らした。

門から顔を出したのは、小太りの中年男性だった。片手には白い少し黄ばんだハンカチが握られていて、今もまだ、額にうつすらと汗が見える。瞳は頬の肉にかくされて、見えないのではと思うほど細く、身体にきちきちのタキシードを着ていた。

「ど・・どちら様ですか？」

うわずつたような、高い声が耳朶をうつた。執事は手に握られていたハンカチを無理矢理上着のポケットにつっこんで、笑つた。ポケットから、だらしなくハンカチが頭を出している。

それに気づかぬ振りをして、レインは優しげに微笑んだ。

「アルティラルド教会のエクソシストです」

「きよつ・・・！？」

執事は細い目を見張つて、リルとレインを交互に見つめる。そして、今度は見るからに青ざめ、頭を下げた。

「も・・申し訳ございません！」

なぜか謝り、執事はリルとレインを屋敷の中に案内した。

屋敷の中は、さすが貴族とあって、清潔だった。埃ひとつない廊下を歩きながら、リルは歩く。

悪魔の気配はしない・・・

視線だけ左右に動かし、リルは意識を集中する。悪魔の気配を感じ取るのは、レインよりもリルのほうが上のため、レインはもっぱら情報集めをしている。今も、執事になにか質問しているようだ。

「失礼します」

執事の、高い声が響いた。それと同時に扉が開き、そこには、もう五十代だが目を見張るほどの美男と美女がいた。

「では、失礼いたします」

執事は一礼すると、部屋から出て行つた。リルとレインは、執事が部屋から出て行つた直後、一礼する。

「はじめまして。アルディラルド教会エクソシストの、リルディウス・ローズです」

「同じく、レインレット・アルスです」

「はじめまして、よくぞ、ここまでおいでくださいました。感謝しますわ」

夫人はリルとレインに握手を求めるよつ、手を伸ばしてきた。二人とも、慌てることなく手を握る。その手は、とても細く、頼りなかつた。

「それでは、娘を紹介しよう。

入ってきなさい」

いまま一度も口を開かなかつたローサルド卿がそう言つと、リルたちが入ってきた扉とは、反対にある扉が開いた。

そこから入ってきたのは、またもや目を見張るほど顔立ちの整つた姉妹だつた。

二人とも、母の血を濃く受け継いだのか、銀の髪に、翡翠の瞳をしている。姉であろう方は、だいたい20代後半ぐらいの年頃で、肌はもはや白を通り越して、青白かつた。胸元が大きくさけているドレスに身を包んでいる。その姿が艶めかしく映らないのは、儂げなその表情からだらう。

妹の方は、10代後半 リルとレインと同年代ぐらいの少女だつた。軽くウエーブがかかつた銀の髪は肩に届くくらいまでしかなく、少しつり上がつた翡翠の瞳に、肩がむき出しなドレスを着ている。

「これが、我が娘

」

「どういうことですか！？お父様！」

自慢げに紹介しようとした父の言葉を遮つて、妹の方

レイ

チエルは怒鳴つた。その頬は怒りで赤く染められている。

「どうして、エクソシストがここにいるの！？嫌よつ！嫌嫌嫌嫌嫌
つつつつ！」

髪を振り乱して、ヒステリックに叫ぶレイチエルに、リルとレインは呆然とした。すると、レイチエルの隣にたつていた姉、エリザベ

スが顔をよりいっそう蒼くした。

「レイチャエル！そんなこと

「お姉様は黙つて！」

「レイチャエル！おやめなさい！」

姉妹二人の言葉を遮ったのは、夫人だった。鋭い眼光で母に睨まれたレイチャエルは、ひるむ。

「見苦しい！あなたは次期当主なのですよ！？」もつと自覚をしなさい！」

「・・・・・」

レイチャエルは下唇をかみしめ、音を高くならして、その場から逃げるようになつていった。バタンッと大きな音をたてて、扉が閉められる。

「・・・・・」

部屋に、静寂が広がった。

リルとレインは気まずそうに顔を見合させ、リルは小さくため息を吐いたのだった。

「すみません、エクソシスト様」最初に沈黙を破ったのは、夫人だつた。レイチエルのいた場所を見てため息をつき、リルとレインに深々と礼をする。レインはそれに慌てる。

「そ、そんな！大丈夫ですよ、顔を上げてください」
「ありがとうございます」

夫人はレインの言葉を聞くやいなや、顔を上げる。その表情には、僅かながら苦渋の色が見えた。きっと、どこの生まれかもわからぬ人間になぜ、とでも思つてゐるのだろう。

「本当に申し訳ございません、エクソシスト様」
エリザベスは未だ顔を蒼白にしてリルとレインに何度も頭を下げた。さすがにリルが苦笑して、宥める。

「大丈夫ですよ。本当に。職業柄、慣れていますから」
むしろ、野太い男の声で怒鳴られるよりマシだ、とリルは続けようとしたが、やめた。

リルと隣では、レインもエリザベスを宥めている。エリザベスの顔は、蒼白で、今にも泣き出しそうだつたからだ。

「ど、とりあえず」

ローサルド卿は、場を持ち直すため、こほんと咳払いをした。

「こちらが、我が娘のエリザベス、さつきまでいたのが、レイチエルだ」
「わかりました。それで、私たちは、エリザベス様とレイチエル様の護衛をすればいいわけですね？」

リルが首を傾げて、微笑む。それに、ローサルド卿は肯いた。

「ああ。そうだ。宜しく頼むよ」

ローサルド卿は、皮肉つましく笑つて、近くにいたメイドに田配せした。メイドは一つ軽くと、リルとレインを誘つ。

「じゅうりく。お部屋へこ案内いたしますわ」

メイドは愛想なく、無表情で、無機質な声でやつまつと、扉を開けた。リルとレインはその後に続く。

さつさと終わらせて帰ろう

リルは、今まで異常に深いため息をはくと、前で歩いているメイドの後ろ姿を見た。

部屋は、客人用なのか、広かつた。リルとレインの部屋はつながつていて、同じ部屋だつた。
それにレインは田を見開く。
「あ、あの・・・。これ、同室ですよね？」
「いえ、寝室は違います」
「いや、同じだつたら困ります！」
レインは冷や汗をかいた。

「あの・・・なんで・・・」

「……」しかし、お客様用のお部屋は生憎「ございません」ので。旦那様も、まさかエクソシスト様に女性の方もいらっしゃるとは存知なく……」メイドの言葉に、今まで沈黙を守っていたリルの眉がぴくぴくと反応する。少しリルのまとう雰囲気が刺々しくなった。

レインは我知らず、また冷や汗をかいた。

「ローズ様には申し訳ありませんが……」

「いえ、大丈夫ですよ。平氣です」

リルはにこりと愛想笑いを浮かべた。しかし、心なしか声が固い。

「それでは、『ゆっくり』

そう言つと、メイドは足音をたてずその場から去つていった。リルは平然としたままだが、レインは固まつている。

「……なにが、女性の方もいらっしゃるとは」存知なく、だつづーの！悪いか！？私の他に4人いるよ！」

リルは扉に向かつてそう吐き捨てるが、いまだ固まつているレインの足を踏みつけた。

「つー？痛つ」

「いつまで固まつてんの？シャワー室、一つしかないから、どうち先はいる？」

リルは腕をくんで、レインに問つた。レインはまた固まるが、ふうと諦めたようにため息を吐く。

「リルが先で。」

「女の子なんだから」

「？女男関係あるの？シャワーに？」

わからん、といった顔で首を傾げるリルに、レインは苦笑して促した。

「ほら、入るんでしょう？着替え終わったら、俺にいってね。でも、ノックなしで部屋に入らないこと」

レインの注意に、リルはへいへいと氣のない返事をして、シャワー

室に引っ込む。それを見届け、レインは今日何回目かのため息を吐いた。

リルはエクソシストの制服を乱暴に脱ぎ捨て、シャワー室に入る。シャワーを浴びながら、任務について考えていた。すると、ふと気になる発言があった。

『あなたは次期当主なのですよ！』

夫人はこの言葉を、レイチエルに言ってなかつたか？

女が当主になることは珍しいが、別に禁止されているわけではない。ローサルド家は今、女しか子供がないのだから。しかし、当主は本来、長子がなるはずだ。なのに、なぜ次女であるレイチエルが次期当主と夫人に言われた？

「・・・・？」

顎に手をあて、リルは考えた。

エリザベス様が当主ではないの？

なぜ、レイチエル様が？

エリザベス様になにか、当主になれない理由があるの？

「わからない・・・」

リルは、きゅ、と蛇口をしめて、タオルを手にとつた。

レインは別々にわかれた寝室のベットに寝そべりながら、資料を読んでいた。

そこに、ローサルド家の個人情報の記述がある。

「つー？」

レインは起きあがつて、その記述の、ヒリザベス・ローサルドの欄をもう一度読み直す。

「これは・・・」

「レインー、あがつたー」

リルは言われた通り数回ノックして、相棒の部屋の扉を開いた。すると、扉の目の前にレインが今までに取つ手に手を伸ばしていたところだった。

「リルつ・・」

レインは驚いたように目を丸くしたが、すぐに我に返つて、リルに資料を突き出す。

「これ！」

「はあ？個人情報じゃない。これがどうかし・・・」

リルは記述を読んで、目を見張つた。

「エリザベス様は・・・」

リルは資料を手に取り、食い入るように見つめた。

「どういうこと？ エクソシストが恋人つくるなんて・・・。そりやあ、禁止されてないけど・・・」

「不可能に近いだろう。なにせ、死と隣り合わせの職業だ。」

「明日、確かめるしかないね」

まあ、資料に嘘の記述なんてないだろうけど、トレイインは真剣な瞳をリルに向けた。

「確かに、そうね」

リルは一つうなずき、資料を手にもつたまま、自室に帰った。

エリザベスには、過去、エクソシストの恋人がいた、と資料には確かに綴られていた。

朝、暖かい日光が顔にあたり、思わず顔を背けた。リルは数分、ふかふかの布団の中につくまつっていたが、のそり、と起きあがつた。寝室からみると、広い居間が視界に広がつた。見慣れない部屋に、リルは眉を寄せた。慣れない空氣だ。

隣には、レインが寝ているのだろう。欠伸を一つして、洗面所に向かつた。昨日のうちに、位置は覚えたため、難なく洗面所に行く。

そして、昨日の出来事を思い出した。

そうだった・・・

急いで顔を拭き、リルは寝室へと早足で向かつた。勢いよく扉を開け、ベットのすぐ側にある机に視線を向ける。机の上に無造作においてあつた資料をつかんで、目的のページを探す。ページはすぐに見つかった。

何度も文字の列を読み返しても、やはり昨日と同じ内容が綴られていた。

はあとため息をはき、リルは資料を閉じて、机に投げるよつにおりた。

「あら、おはよう」やれこます。エクソシスト様

朝、レインを叩き起しして、リルとレインは一人、夫人の部屋へと

向かつた。

メイドに夫人が起きていると聞き、リルは遠慮がちに夫人の部屋の扉をノックすると、すぐに声は返ってきた。扉を開けると、夫人はにこりと微笑んだ。

「で、どうしましたの？」

いささか声音が堅い。リルはそれに気づかないふりをして、一言言つた。

「エリザベス様に、昔恋人がいたんですね」

「・・・つ！？」

夫人は驚きに目を見開き、リルを凝視する。そして、睨んだ。

「どこで・・・それを？」

「依頼主、そしてその関係者の個人情報は、教会が徹底的に調べるんですよ」

レインが隣から答え、リルが夫人を睨んだ。

「その恋人が、エクソシストだと書いてありましたが、本当ですか？」

「・・・・教会から得た情報は、絶対でしょ？なんで確認したきたんですね？ええ、確かにそうでした、あの子の恋人はエクソシストです！」

悲鳴のような声で、夫人は言った。そして、もう聞かないでとか細い声で言つと、しゃがみこむ。でも、聞かないわけにはいかなかつた。

「アルフレッド・イレイサー」

リルの声が、室内に響く。

「彼は、あなたの娘と別れた後、死んでいます」

「し・・・ん・・だ・・・？」

夫人は翡翠の瞳を見開き、リルを見た。その瞳は揺れていた。

「し、んだ・・。死んだ？死んだのね！」

夫人は嬉しくてたまらないと言つたように、くるりと回つた。
「よかつた！よかつた！・・あいつのせいで！あいつのせいで、エリザベスは当主になれないのよ！代々長子が受け継いできたのに！あの子は、結婚もできない！なんにもできずに死んでいく運命だつた！」

嬉しい、嬉しい、と夫人は若い娘のようにはしゃぐ。

「嗚呼・・・でも、あの子は当主になれないわ。エリザベスのほうが当主になる頭脳はあるけど、レイチエルは私にそつくりなんだもの・・・」

夫人はそう言つて、ソファーに深く腰かけた。

「嬉しいお知らせをありがとうございますわ」

「まだ話は終わっていません」

満足感に浸つている夫人に、リルは冷たく帰した。

「今・・・、エリザベス様が当主になれない、と言つていまつたが、どういうことですか？」

「・・・・・あの男が、エリザベスとは違う女の元へいったのが、原因ですわ。あの子は、精神が弱かつた・・・、恋人に裏切られて、相当ショックだつたのね」

まるで他人事かのように投げやりにそう言つ夫人に、レインは訝しげな顔をした。

「その言い方だと、まるで他人事ですね」

リルがそう皮肉げに言つと、夫人はふん、と鼻をならした。

「だつて、そなんだもの」

ぴしり、トリルは固まつた。

リル・・・リルティウス・・・あんたが、あんたさえ、いなけれ
ば・・・！

あの人には愛されないのは、あんたのせいよ！

何のために、あんたを生んだと思つてゐるのー。

「何のために、あの子を産んだと思つてゐるんです？当主にするため
ですわ。でも精神が弱くつて・・・あげく、恋人つくつて、逃げら
れるなんて。ローサルド家の恥だわ」

「・・・・・」

リルは震える手を、もう一方の手で強くつかんだ。

レインはそれに気づき、今すぐ相棒の両耳を塞いでやりたい、とい
う心境にかられた。

「逃げられたショックで、子供は産めないのよ？レイチエルは万が
一の保険だつたけれど。よかつたわ、役に立つて」

リズディアス様は、いとも簡単に解けた問題よー早くやりなさい
！早く！

『やめて、お母様。できない、わたしにはできない
よ・・・』

なんて役立たずなのー！あんたなんかができたから、・・・できた
から、私は追い出されたのよー！

あんたがいるから、私はあの人に愛されてもうえなかつた！

「めんなさい」、「めんなさい」

でも、ねえ、わたしはお母様に愛されたかつた

「・・・もう、結構です。ありがとうございました」

リルはうつむき、そう言つとその場を逃げるようになつていつた。レインも後を追い、夫人はまだ落ち着いたのか、ソファーにもたれかかつた。

「リル」

早足で廊下を行くりルの肩を、レインがつかんだ。リルは足を止めた。いまだ、手が震えている。

「なきないわね・・・、本当に」

もう、克服したはずなのに

「『めんね、レイン

「いいよ、リルは悪くない」

レインは首を左右に振り、リルの肩を強くつかんだ。

リルはそこでようやく顔を上げる。その青の瞳は、色を無くしていた。

脳裏にちらつく、母の姿。

父に愛されなくて、それが悔しくて、悲しくて、発狂する母。

「リルは、リルだよ」

頭を優しく撫でられ、リルは瞳をじっぱに見開いた。

「レイン・・・」

撫でる張本人の相棒の顔は、驚くほど穏やかだった。

「・・・ありがと」

そう言って、リルは泣きそうな顔で微笑んだ。

朝食。でかく、無駄に長いテーブルで、リルとレイン、夫人、ローサルド卿、エリザベス、レイチエルは黙々と朝食を口に運んでいた。特にリルとレインと夫人の間には、気まずい空気が流れている。夫人の隣に座っているローサルド卿は顔を引きつらせている。エリザベスは、昨日のように顔が蒼い。

「・・・・・」

また、沈黙が流れた。

リルとレインは同時に食べ終わり、立ち上がる。

「ごちそうさまでした。とてもおいしかったです」

リルとレインはそう言って、近くに控えていたメイドに微笑んだ。メイドはなにがおこったかわからない様子だったが、すぐにその顔はトマトかのように紅くなる。

「では、エリザベス様、レイチエル様、今日、なにかご用時はありますか?」

リルは丁寧な口調で、一人に問い合わせる。エリザベスは首を振った。

「いえ・・特に、屋敷を出る用事はなにも・・・」

「私もないわ」

隣に座っていたレイチエルは、冷たくそう言つ。そして、リルとレインを見て、口を開いた。

「あなたたち二人の中からどちらか私に付くなら、そっちが良いわね」

顎で示された先には、リルがいた。リルは瞳を見開いて、レイチエルを見つめる。

「は・・・?」

リルは、目の前に黙々と勉強をしている少女の顔を凝視していた。レイチエルはその視線に気づいているのか、いないのか、ただ綴られた文字を読み取り、問題を解いていている。ちなみにその問題はリルやレインだったら、ものの数秒で解けるであろう問題だ。

「・・・・なによ」

レイチエルは不機嫌そうな面持ちで、リルを睨んだ。睨まれたリルは眉を寄せた。睨みたいのはこっちだ、と心中で悪態をつき、表面上は爽やかに微笑んでみせる。

「僭越ながら、エリザベス様、そこの解、間違っていますよ」「あ・・・」

間違いに気づき、レイチエルは口の失態に赤面する。そして慌ててそこを直した。

「・・・で、本題に入りますが」

「さつきのは本題じや、なかつたわけね」

「それはまあ、どうでもいいとして。あの、レイチエル様、なんで私をご指名されたのですか？」

レイチエルはリルの問いに、言葉を詰まらせた。視線をリルからはずし、そっぽをむく。

「…………あなたが、女だからよ」

「はい？」

リルは今度こそ聞き返した。自分でも素つ頓狂な声だと自覚しているが、そう言うしかない。

「女、だから？」

「どうせ、あんたちは、姉様の・・その・・・

「恋人ですか？」

「つ・・・そうよー」

レイチエルは憎悪のこもった顔をして、リルを見た。

「あの男・・・！許せないのよ・・だから・・・」

「同じ男でエクソシストであるあいつを敵視しているってわけですね」

レイチエルの言葉を遮り、リルは冷淡な声で言つた。

レイチエルはリルのその反応に少し怖じ氣づいたが、すぐに立ち直る。

「そうよ！悪いの！？あの男のせいで・・・

「自分がなりたくない当主にならないといけない？」

「つ」

リルはレイチエルの言葉の先を口に出した。そして、嘲笑を浮かべる。

「確かに、そうですね。アルフレッド・イレイサーのせいで、エリザベス様は子供を産めない。そして、必然的にあなたが当主にならないといけなくなる・・・。でも」

リルはそこで区切り、レイチエルを睨んだ。

「だからといって、レインを敵視している理由には、なりません」「なつ・・・！？あなたも、女だからわかるでしょうー？あの男は

「確かに、最低だと思いましたよ、話を聞いたら」「リルはそう言うと、言葉を続けた。

「でも、イレイサーとレインは、関係ないですよね？変に敵視するの、やめてくださいません？居づらくなるので」「

リルはそう言い切り、微笑んだ。レイチエルは口をぱくぱくと開け閉めして、顔を紅くする。

「あんた

」

「ほら、さつさと勉強してくださいよ」

リルの言葉に、レイチエルはは、となり、時計を見る。そして、勉強は再開された。

エリザベスは、屋敷の庭で椅子に座り読書をしていた。その隣には、レインが立っていた。二人の間に会話はなく、時折レインが困ったように辺りを見回しているだけである。

ち・・・沈黙が痛い・・・！

レインは冷や汗をかきながら、エリザベスを見た。見れば見るほど美人である。作り物のように整った顔、風に揺れる銀の髪は、まるで月のようだ。

エリザベスは表情を一つも変えず、本を読んでいた。音は、ページをめくる時だけ、二人の耳朶をつつ。

レインは昨夜のエリザベスの恋人について知り、なぜレイチエルがあれほどこちらを嫌つているのか予想できた。そして、今日のあの態度から、その予想は真実になる。

レインはなぜエリザベスがこちらを嫌わないのか不思議だ。嫌つて

ほしいわけではもちろんないのだが、レイチエルがあれほど激昂していく、なぜ当の本人が平然とむしろ、レイチエルの態度について申し訳ないという目線でこちらを見る？

レインはまた、エリザベスを見た。

本人の性格の問題もあるだろうが、それでも少しばかりこちらを敵視してもおかしくないはずである。

まあ・・・嫌われてたら、仕事し難いし。いいか

そうしよう、と自分で納得して、レインはため息を吐いた。

憎い、憎い

なんで？なんでわたくしでは駄目なの？

嗚呼・・・わたくしは誰よりも綺麗よ、綺麗。だから・・・ねえ？

早くわたくしの元へ、戻ってきて

アルフレッド・・・・・

「レイチエル、・・・それに、エクソシスト様。すこし、お話がりますの」

夕食をしている時に、エリザベスが遠慮がちにそう言った。驚きに目を見張るリルとレインだが、すぐに立ち直り、「わかりました」と応える。レイチエルは小首を傾げたが、すぐに快い返事を返した。「それじゃあ、食べ終わりましたら、庭に行きましょう」

エリザベスは、花が咲くように微笑んだ。

「それで、話というのは、なんなんですか？姉様」

レイチエルは怪訝そうな顔をして、エリザベスを見る。二人の後ろには、リルとレインがいる。

エリザベスは、徐おもむろにリルとレインを振り返り、頭を下げた。

「レイチエルを、お願いします」

「は・・？」

レインが間の抜けた声で聞き返す。リルは、険しい顔でエリザベスを見ていた。

「ごめんね・・・、ほん、と・・・連れてくれるつもり、なかつたのだけれど・・・」
エリザベスの声は、どんどん途切れ途切れになり、そして、低い、男の声になっていく。

エメラルドの瞳から、涙がこぼれた。

めんね こめんなさい せいかい

九
小

いた。瞬間、身体から禍々しい力が放出される。

- 姉様！？

レイチニルが血相を
の腕を引っ張つた。

「なにをやるのー!?」

「下がって！殺されるわよ！」

リルは銃先をエリザベスにあてたまま、レインに田配せをする。レインは肯くと、レイチェルを促した。

「拙いモノ」

「無心にして」のノン

「あ・・・」

予想通りの拒絶にレインは苦笑するしかなかつた。が、レイチエル

「」・「」・「」

レイチャルはうつむき、レインに謝罪しようとしたが、口を開いた。

ヒヤリハットの言葉を聞き、心が震えました。

エリザベスだった。

「ねえ・・・たま・・?」

レイチエルは、信じられないといった瞳で、姉を見つめる。エリザ

ベスは瞳を見開き、狂ったように笑っている。

「く・・つもう、手遅れか・・」

レインが眉をよせ、低く呟く。エリザベスの爪は黒く変色していて、長くなっている。そして翡翠だった瞳は血のような紅に変わっていた。

「悪魔・・・」

リルはそう言い、銃を構え直す。エリザベス いや、エリザベスだつたものは、まだ狂つたように笑っていた。

「とんだ茶番だつたなあ！女あ！」

悪魔は自身の体をかき抱くように両手を交差させた。

「嗚呼・・お前と契約して、実に楽しかったよ。一人の愚かな男のためにこの手を紅く染めた！十分願いを叶えてやつたよなあ？ほうら・・あの女を殺せば・・」

悪魔はその紅い穢れた瞳で、レイチャエルを見据えた。口が裂けるようには弧を描く。

「お前の望んだ、一番良い女になれる」

そう言うやいなや、悪魔の姿が消えた。いや、早すぎて見えなかつた。

「レイチャエル！？」

リルの絶叫がこだました。

レイチャエルは瞳を堅く閉じ、衝撃を待つしかない。しかし、その衝撃はいつまでたつてもこなかつた。

「・・あ・・・？」

レイチャエルが、おそるおそる田を開ける。すると、そこには黒い布が広がっていた。

それが、リルとレインがきているエクソシストの装束だと気づき、顔を上げると、銀の十字架が月光で鈍く煌めいていた。

さらに視線を巡らせるとい、紫の色を宿す瞳と皿があつた。

「レインっ！」

次に、リルの声が耳朵をつつ。レインの左肩から、なにか、黒いものが飛び出しているのが見える。その黒いものから、綺麗な紅い液体がしたたり落ち、地面に落ちて斑まだらを描く。

「あ、んた・・・なんで・・・」

レイチエルが震える手を肩に伸ばす。肩に貫通しているものが、悪魔の爪だとその時気づいた。

「大丈夫ですか？レイチエル様」

レインは自分の傷など気にもとめず、レイチエルに聞く。レイチエルは呆然とレインを見た。

「こいつ・・・頭大丈夫なの？」

自身をあれほど毛嫌いしていた人間を、身体をはって護り、あまつさえ心配までするとは。

「レイン、少ししゃがみなさい！」

リルと声と同時に、レインが素早くしゃがむ。突如、銃声が響いた。弾は悪魔に当たった瞬間、爆発する。

「・・・ つ！？」

悪魔が飛び退き、距離をとつた。

「何事ですか！？」

続いて、夫人とローサルド卿が早足でこちらに向かってきた。エリザベスを見て、二人は息をとめる。

「悪魔・・・」

ローサルド卿が咳き、夫人が癪癩をあげた。

「なんなんですか！？あの化け物は！」

悪魔、嫌、エリザベスの身体がぴくりと痙攣した。

「はやく退治しなさい！エクソシスト！」

「・・・・・・」

リルが眉間にしわを寄せて、夫人の頬を叩いた。乾いた音が響く。

「・・・ それを仕事にしているのは、私たちだけど、・・・

「 リルはちらり、と悪魔を見た。

悪魔は両手で顔を覆い、涙を流している。

「ぐ・・あああ・・・や、めろ！クソ女あ・・！」

悪魔は左右に首を振つていて、瞳が、紅くなつたり、翡翠に戻つたりを繰り返す中、必死に藻搔いでいる。

「ああああああ！」

悪魔の絶叫が轟く。レインが辛そうに顔を歪めた。

「自分の子を・・・道具としか見ていないあんたは最低よ」

リルは夫人を睨み、そして悪魔に銃先を向けた。

悪魔と銃先の間に、レイチエルが滑り込む。

「・・・！？」

リルが驚いたように目を丸くする。

「まつて！・・・お願ひ、まつて・・・」

懇願するようにレイチエルはリルに頭をさげ、悪魔になりはてたエリザベスを振り返る。

「姉様・・・」

必死に藻搔いでいる姉の姿に、レイチエルは苦しそうな顔をした。

「姉様・・・辛かつたよね・・」

レイチエルは腕を伸ばし、エリザベスをかき抱いた。自分より頭一つ分でかい姉を、背伸びして抱く。

「ごめん・・・ごめんなさい・・・」

悪魔の言葉で、レイチエルは悟つた。

姉は、恋人に裏切られた。それも、この街でエリザベスとレイチエルの次に美しいとされている女とアルフレッドは恋人同士になつたのだ。一番はじめの被害者は、その女だつた。

ただ、アルフレッドに振り向いてほしい一心で、美女と噂される女を殺していく。

「レ・・・チ_ヒ・・ル・・」

エリザベスの声が、レイチャエルの耳朵をうつた。が、次の瞬間、突き放される。

「・・・ご・・めんね・・・でも・・・もう、駄目みたい・・・」

エリザベスは荒い呼吸を繰り返しながらも、レイチャエルに微笑んだ。

「姉様！」

リルはレイチャエルの身体をかきだき、止める。

「まつて！今いくと・・今度こそ殺されるわよ！-」

「それでもいいわ！離して！」

「離すわけないでしょー！？私はあんたをエリザベス様に任されたんだからー！」

レイチャエルは顔をあげた。リルは、険しい顔をして、エリザベスを見ている。

「普通、悪魔と契約したら、そりゃあはじめは自身の意識があるでしうけど、変ね・・・、エリザベス様はいまでも、意識があつた・・・、それに、悪魔のほうも・・・」

今までとなにか、違う

リルは眉間にしわをよせ、レイチャエルを相棒に任せた。

「レイチャエルは任せたわよ。私は・・・」

リルはレインの顔を見て、すぐそらす。

「悪魔を退治する」

「リル・・・」

レインはレイチャエルの腕をつかみ、離さないようにしながら、リルの青の瞳を見つめた。返ってきたのは苦笑だった。

そしてリルはレイチャエルを見て、悲しそうな顔をする。

「・・・『めんね
「つ・・・！？』

レイチエルはレインの腕の中で藻掻きながら、泣きそうな顔をしてリルを見つめた。そして、俯く。

嗚呼、こいつは・・・

姉さんを、解放してくれるんだ・・・

それは、殺すと同じことだ。でも、なぜか、憎しみなんてわいてこなかつた。

「主神ゼウスの名のもとに、悪の禍々しき魂を救済しますー。」

闇に銃声が響いた。

リルのうつた弾が、エリザベスの胸を打ち抜いた。

エリザベスの姿が、元の、美しいものに変わる。見開かれた瞳は綺麗な翡翠だった。

「・・・ありがとう・・・」

耳に心地よい、女の声が耳朵をつつ。それは、一番穏やかな声だつた。エリザベスの身体は砂色になり、闇に四散する。

「・・・」

レイチエルは、もう緩くなつたレインの腕からぬけ、エリザベスのいた場所に座り込む。そこには、エリザベスの着ていたドレスだけが、無造作に落ちていた。

「・・・姉様は・・・」

レイチエルの、冷淡な声が響いた。

「本当に、アルフレッドを愛していたのね」

自分とは違う女に走つた男を。エクソシストであり、いつ死んでもおかしくなかつた男を。

彼女はただ、ただ愛していた。

「・・・・そう、ですね・・・」

リルとレインは、レイチエルの隣までいき、瞳を閉じた。

一番はじめの被害者が、エリザベスの次のアルフレッドの恋人だつた。

エリザベスは、恋人に裏切られ、寝取った女を恨んだ。なぜ自分じやないのか、なぜ駄目なのか、自分のほうが美しいのに、そういう感情が、悪魔につけ込まれることとなる。

エリザベスは寝取った女を殺し、自分が一番美しいのだとわからせるために、美女と噂される女を次々と殺していくつたのだ。

「・・・ふう・・・」

リルはため息をつき、大きくのびをした。報告書を書いていた手をとめ、レインが振り向く。

「どうしたの？」

「なんでもない」

レインは小首をかしげ、まだリルを見ている。その視線が気まずくて、リルは背を向いた。

「　　なにか、あつた？」

リルは、ベットに横たわる。レインに背を向けた形のまま、リルは口を開いた。

「別に、なんでもないわ・・・。　　ただ・・・」

夫人は、エリザベスが死んでも泣かなかつた。もともとレイチエルしか子がいなかつたかのように、今、振る舞つていてる。

リルとレインは、今日、この屋敷を出る予定だ。

悪魔を退治して、2日たつた。警察と教会に連絡したりと忙しかつた2日に、おもわず黄昏れる。

レイチエルはあの夜から、会話をしていない。エリザベスが死んでから、レイチエルは必要以上しゃべらなくなつた。ローサルド卿は、

いまだに真実を受け入れないでいるようだ。

それも当然だろ？ まさか連續殺人事件の犯人が我が娘とは思うまい。

「……私、貴族が嫌いよ。大嫌い」

「……そうだね」

レインの悲しそうな声に、リルはシーツを握りしめる。
「自分勝手で、傲慢な貴族なんて、大嫌いよ」

だから、トリルは続ける。

「私は、自分自身も、大嫌い」

シーツを掴む手に力を強く入れた。

「……リルは違うよ」

頭に、ぱんとぬくもりを感じた。それがレインの手だと知り、リルは不覚にも泣きそうになる。

「……ごめん」

リルはそう呟き、起きあがつた。

「それでは、お世話になりました」

レインとリルは、屋敷の門の前で夫人とローサルド卿、そしてレイチエルに頭をさげた。夫人はにこりとほほえみ、手をふる。

「いえ、そんな。」ちらりと、化け物を退治してくださって、とても感謝しておりますわ」

「・・・・ありがとうございます」

夫人の言葉に、その場のほぼ全員が反応した。リルは怒りを押し殺した声で返事をし、馬車に乗り込む。その時。

「ごめんなさい！」

後ろから、少女の声がした。

振り返ると、レイチエルが顔を紅くしていた。

「・・・そ、の・・失礼な態度をとつて、ごめんなさい・・・」最後のあたりの声は小さく、聞こえないぐらいだった。しかし、その言葉にレインもリルも頬が緩くなる。

「赦してあげる」

リルはそういうて、微笑んだ。

「あ・・・・」

リルとレインが一人、乗り込んだ瞬間、馬車が走り出す。

レイチエルは、少し走り、そして叫んだ。

「ありがとう つ！」

届かないとしても、そう叫び、レイチエルは一筋の涙を流す。

「あなたたちのおかげで、姉様は救われたわ・・本当に、ありがと

う」

そう言って、レイチエルは祈るように両手をあわせた。

愛しい人よ。どうか、どうか。

私の元に、戻ってきて。

私が望んだのは、ただそれだけだから。

ルエルから帰ってきて、早3日たつた。その間に低級悪魔退治の仕事があつたりしたが、それも難なくこなし、よつやく休暇らしい休暇があつた時、嵐はやってきた。

「リルつー！久しぶり！もーお兄ちゃん心配で心配で・・」

「・・・なんであんたがここにいるんだびつでもいいねびつでも離せ変態がああああああつー！」

その日、朝から少女の罵声が轟く。

「はあー、よつやく休める・・」

リルは大きく伸びをして、そう呟いた。隣でレインが肯いている。

「そうだね・・。ですがに深夜連続悪魔退治は慣れない・・」

こつた肩をほぐして、レインもため息を吐いている。ルエルから帰ってきて、1日休めるはずもなく、夜、任務にかり出されたのだ。アルディラルド王国は確かに他の国よりエクソシスト数が多い。が、悪魔のほうが断然多いので、エクソシストは、ほぼ3日に1回と言

つて良いほど任務をこなしているのだ。

「今日は一日寝ようかな・・・

そうリルが呟いた時、足音が聞こえた。振り返ると、そこにはメリセリタが起立している。

「リルディウス・ローズさん！ルエルではなんとか建物を壊さなかつたみたいじゃない？少しは成長するものなのね！愚か者つて！」

「そうねえ・・・本当に良かつたわ。けど毎回毎回私を見たら必ず話しかけてくるあなたはよっぽど暇なのね。アシユルさん」

「つ・・・そうね、確かにあなたなんかに構っている暇なんてなくてよ！これから任務があるの。失礼しますわ！」

「・・・その割には相棒がないわね」

リルはぼそりと呟く。メリセリタは羞恥で顔を真っ赤にし、大股でその場を去ろうとした。その時だ。

「リルウウウウウ！」

甘つたるい男の声が、響いた。呼ばれた本人は聞き覚えのある声に思わず顔を引きつらせ、振り返る。すると、綺麗に手入れのされた庭から、こちらまで走つてくる、20歳頃の青年がいた。琥珀色の髪に、黄緑の瞳をした、顔の整つた青年だ。その顔は満面の笑みで彩られている。

「リルつー！久しぶり！モーお兄ちゃん心配で心配で・・・

「・・・なんであんたがここにいるんだどうでもいいけどさつわと離せ変態があああああつ！」

リルは絶叫をあげ、こちらを力いっぱい抱きついてくる青年を蹴飛ばした。

「あれ、リルのお友達？」

感動の抱擁を堪能できず、悲しそうな顔をしていた青年が、ふとメリセリタに気づく。メリセリタはいきなり現れ、強敵に抱きついてきた不審な男を呆然と見つめていたが、我に返った。

「お友達なんかじゃありませんわ！？」といふか、あなた、リルディウス・ローズのなんなんですの！？」

「『ローズ』・・・」

青年は、リルの名前をきき、驚きと悲しみに染まつた瞳をリルに向ける。リルは気まずそうに俯いていた。

「そうか・・・」

青年はそう呟いて、先ほどの表情は嘘かのようにほほえみ、リルの肩を自分側に引き寄せる。

「リルの恋人です」

「気持ち悪い・・・冗談をそんな笑顔でわらわと言つなあああつ！？」

青年の言葉を聞いてリルは今度、鳩尾に拳を打ち込んだ。青年のうめき声が聞こえる。レインは複雑な気分で青年を見て、リルを慌てて止めた。

「リ・・リル・・・駄目だつて！」

「だつて、こいつが・・・」

リルがまた怒鳴ろうとするが、レインが止める。青年はものの1分で起きあがり、爽やかな笑みを浮かべていた。

「駄目じゃないか・・リル。女の子がこんなこと・・・」

「もーやだこの人本当気持ち悪い」

リルはげつそりとやつれ、黄昏れる。レインはそんなリルを慰めるように肩を叩いた。放置されていたメリセリタはさすがに我慢でき

なくなり、声を上げる。

「それで！本当にあなた何者なんですか！？」

「ああ」

そういうえば、と青年はメリセリタにほほえみかけて、優雅に一礼した。

「初めまして。俺の名はリズディアス・オールウェイ。リルの兄だよ

「オ・・・オールウェイって・・・」

メリセリタは顔を真っ青にして、一步後ずさつた。

「オールウェイ公爵・・・！？」

「そうー」

朗らかに笑う青年の正体は、公爵のご子息だった。

「で・・でも、リルディウス・ローズの兄って・・・」

名字が違う、とメリセリタは怪訝な顔をした。その言葉にリズは少し悲しそうな顔をし、レインは眉をよせる。

「この子の本当の名は、リルディウス・オールウェイなんだけどね・

・・・」

リズはどこか遠くを見つめるような顔をして、リルを見つめる。リルはリズに顔を背けたまま、握り拳をつくつた。

「・・・私には、その名を名乗ることはできないわ・・・わかってるでしょ？私は家族になる資格なんてない！」

「でも母さんも父さんもお前を待ってるよ。娘だと、大切だと想つてる。それでもかい？」

「・・・っ・・・」

リルは言葉をつまらせ、そのまま走った。リズからともかく逃げたかった。

わかつてゐる・・・父様も義母様も待つててくれるってわかつてる・・・！

でも・・・

「私はあの人たちに愛される資格なんてない・・・！」

「なんなんですか？ いきなり走つて・・・」

メリセリタはリルの走つていった方向を見て、怪訝そうに呟いた。レインは苦しそうな顔をして、俯いたままだ。リズはリルのいた場所を、悲しそうに見つめていた。

「家庭の事情つてやつだよ・・・。ごめんね、変な所見せちゃつて。それじゃあ、俺はレインレット君と話しがあるから」

そう言って、リズはレインの腕をつかみ、歩き出した。

「レインレット君、君の部屋どこだっけ？」

「あ・・・今歩いている所とは逆方向です」

「久しぶりだね。背も伸びたんじゃない？」

レインの部屋の椅子に当然と座り、リズは朗らかに笑う。レインは苦笑した。

「そうですか？」

「そうだよー。・・・・・リルは、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。元気です」

リズが心配げに問うと、レインはほほえみ、そう返した。その返答に、リズは安心したような顔になる。

「・・・・・で、一つ、聞きたいことが」

「はい？」

レインが小首を傾げると、その両肩をリズが掴んだ。

「リルに、手え出してないよな・・・・・？レイン」

低い声で、両肩を掴む手に力を込めるリズに、レインは真っ青になる。

「だ・・・出してません！出してません！安心してくださいー！」

「ふうーん？ならいいけど」

ぱ、と手を離し、リズは顎に手をあてた。

「まあ、万が一リルに手え出しあつもんなら、俺が即刻闇に葬つてやるが・・・」

「口調が素に戻つてますよ・・・リズさん。あと恐ろしいこと言わないでください」

顔を引きつらせて、レインは一步足を引く。リズは恐ろしい笑みを浮かべていた。

「お前のことを信頼して、リルを任しているんだ。頑張つて護つてくれ」

俺のぶんまで、とリズは微笑んだ。レインは目を丸くしていたが、微笑む。

「

「はい」

リルは息を切らすことなく、適當な所で走るのを止めた。周りを見渡すと、庭のはじだとわかる。

周りには神官が一人もいなかつた。リルはため息をはいて、腰をおろす。

体育座りをして、膝に顔を埋めた。

「そういえば・・・」

リズはふと顔をあげ、窓から青空を見た。どこまでも続く青空に、リズは自然と顔を綻ばせる。

「リルと初めて会った日も、こんな空だつたなあ・・・」

それは、遠い昔の出来事。

雲一つない青空だった日、その子と初めて会った。

その子は、綺麗な長い金の髪をし、青灰の瞳をした、顔立ちの整つた子だった。でもその瞳はどこか濁つていて、その目に自分は映つていらないんだ、と幼いながらもリズは理解していた。

「リルディウスっていうのよ。今日からあなたの妹になるの」

その子の隣で優しく微笑む母の言葉に、リズは大きく肯いた。

「よろしく！リルディウス！」

「・・・・・」

リズが満面の笑みで手をのばし、握手を求めて、リルはただ空を見つめるだけで、なにも反応を返さなかつた。

それに母がすこし悲しそうな顔をする。リズは小首をかしげて、妹である少女を見つめた。

4歳ぐらいだろうか。腕や足に、包帯が巻かれている。顔には擦り傷や切り傷が無数にあつた。

「傷、大丈夫・・？」

リズが顔に手を伸ばそうとする。が、その手は顔寸での所ではじき返された。

「・・・さわらないで」

初めて、その子の声を聞いた。か細く、小さい声。幼い声はしかし、冷たさを宿していた。

少女はすこし顔を俯かせ、そのまま庭のほうへ走つていった。母は顔を俯かせ、肩を震わしている。リズはなにが起きたかわからない、といった顔で呆然としていた。

その日、結局リズはリルと会話ができなかつた。庭にいたリルに何度も話しかけても、リルはまったく相手にしなかつた。

リルに割り当てられた部屋は、リズの隣に部屋だつた。

リルの部屋の扉を数回ノックする。しかし、なにも返事がこなかつた。思つていた通りだつたので、リズはやつぱり、と少し悲しそうな顔をしたが、すぐ気を取り直して、扉を開いた。

「はいるよー」

そう言つて、リズは部屋にはいる。部屋の明かりはついていなかつた。もう寝たのか、とリズはすこし驚く。ベットに近づいていく。

「あ・・・」

そこには、無垢な寝顔を見せる少女がいた。すうすうと規則正しい寝息をたてている妹を起こさないよう見つめる。

「ん・・・」

寝返りをうつて、リルは眉をよせた。顔が歪む。

「リルディウス・・・？」

リズは心配になつて、妹の名を呼ぶ。リルは首を横にふり、小さくなにか呟いた。

「・・・ご・・め・・な・・い・・・」

「え・・？」

リズは眉をよせ、リルの口に耳を近づける。

「ごめ・・・な・・・さい・・・かあ・・・さま・・・」

涙が頬を伝い落ちる。リルは悲しそうに顔を歪めて、なんどもなんども謝つていた。

「母様？・・・」

リルは母になにかしたんだろ？か、トリズは首を傾げた。

「いりません」

出された朝食をみて、リルは首をふった。
リズは不満そうな顔をする。

「なんで？おいしいのに」

「いりません」

リルは小さい声で、強い拒絕を見せる。母と父が困ったような顔をした。

「どうしたの？リル・・・」

「・・・・すみませんでした」

母が心配げに聞くとリルは顔を俯かせて、そう咳き、そのまま部屋を飛び出した。

「リル・・・」

母の悲しそうな咳きが、部屋に木霊す。

「ねえ、母様」

「どうしたの？リズ・・・」

リズが母、リリアリズのドレスの裾を引っ張ると、リリアリズはあわててリズの目線にあわせるように屈んだ。

「リルディウスは、僕の本当の妹なの？」

その言葉に、リリアリズは表情を消した。

「・・・どうして、そんなこと聞くの？」

「だつて・・・妹つて、同じ父様と母様から生まれた下の女の子のことを言つんでしょう？」

リズは小首をかしげて、続ける。

「母様は、いつリルディウスをうんだの？」

リリアリズは苦しそうな顔をして、リズを抱きしめる。リリアリズの隣にいた父、レズストアはリズから顔を背け、呟くような声でいつた。

「すまん・・・」

「謝るのは、アリアとリルに謝つてください」

リリアリズはリズを抱きしめながら、そう言つ。レズストアは、また一言、すまん、と言つた。

「お前にも・・・私は、お前とアリアを裏切つたんだ・・・」

「・・・・・もう・・・いいんです。悪いのは私なんだから・・・」

リリアリズはリズを抱きしめていた手をゆるめ、リズの頭をなでた。

「ごめんね・・・リズには、まだ言いたくなかったのだけれど・・・」

その言葉の次に続く話に、リズは愕然とした。

リルとリズは、異母兄妹だつたのだ。

リズは、リリアリズとレズストアの子で、正妻から生まれた子。リルは、昔この屋敷にいたメイド、アリアとレズストアとの子だつた。アリアとリリアリズは親友で、身分違いだとしても仲の良い間柄だつたそうだ。

しかし、レズストアはアリアを愛していた。リリアリズが嫁ぐ前から、ずっと。アリアも、レズストアを愛していたらしい。しかし、

リリアリズが嫁ぎ、その関係はなくなつたと思つていた。

でも、レズストアはまだアリアに未練があり、こういう結果が招かれた。

アリアが妊娠したと知り、リリアリズは怒りより悲しみが大きかつた。自分のせいで、アリアは不幸になつた、と。周りの使用人からの風当たりも強く、屋敷にいざらくなつたアリアを、二人は遠い土地に逃がした。

アリアは土地にうつされ、そして変わつた。アリアはまだ、レズストアを愛していた。親友であるリリアリズを恨んだ。その祖先は、生まれた子にぶつけられた。暴行をされ続けてリルは育つた。そして、アリアは死んだ。流行り病だつた。残されたリルを、レズストアとリリアリズが引き取つた。

「父様は、知つてたの？アリア様が・・・」「・・・子に、暴力をふるつているとは知らなかつた。近くの住民に聞いたんだ」

私を恨んでくれれば良かつたのに、とレズストアは呟く。リリアリズは、リズを抱きしめた。

「あの子はなにも悪くなかつたのに・・・、あの子は、私を恨んでいるでしようね・・・」

あの子、とは、アリアカリルか。どちらかはリズにはわからなかつた。

「リル」

「……そのなまえでよばないで」
庭でうずくまつているリルに、リズは声をかけた。リルは低く呟いて、顔をあげる。その瞳は相変わらず濁っていた。

「……聞いたよ。君のこと」

「あ、そう……」

以外とあさりせり、リルは言つ。

「それで、どうしたの？」

舌足らずな声で、リルは冷たく言つた。リズはリルの隣に座る。「僕が、にくい？」

「だいつきらいよ」

リズの問いに、リルはすぐ答えた。その答えに、リズはさすがに悲しくなるが、ぐとそれを飲み込んだ。

「君の母様と、父様の仲をひきさいた僕の母様は？」

「きりいじやないわ。でも、あなたはきりいよ。リズティアス」

リルはき、とリズを睨んだ。

リズは首を傾げる。

「なんで？」

「……わたしは、あなたになれないから」
リルは空をみあげて、そう答えた。

「?どういうこと?」

「……かあさまは、あなたがほしかったのよ。ひとつせまにあいされたかったから」

自分より4つ年下の妹の言葉を、リズは理解できなかつた。

「父様に?」

「そう。そうしたら、きつとひとつせまのそばにいけたから。わたしはいらないこなの」

「違うよ。いらっしゃない」

リルの言葉に、リズは首を振る。

「リルは、いらなくない」

「…………どうして？」

リルはそこでようやく驚いたようにリズを見上げた。

「だって、君がきて、僕すつごく嬉しかったんだ。父様も、母様も

一緒だよ」

「…………うそ」

リルはうつむき、呟くように言つた。

「うそよ。せつたいうそ。わたしはいらないこだもの」

「それこそ嘘だよ！」

リズはリルの前に腰をおろし、その頬に両手をそえ、上を向かせる。

「リルは、いらない子なんかじゃない！」

その言葉にリルは瞳を丸くさせる。

「ははっようやく僕をみたね！リル」

リズは嬉しそうに笑つて、リルの頬から自分の手をはずす。リルは虚をつかれた顔をして、不満そうに眉間にしわを寄せた。

「…………」

「はははっ」

その姿に、リズはまた笑つた。

それが、この子との出会い

「はあ・・・」

リルは顔をあげ、身を起こした。さつきからずつと蹲つていたため、尻が痛い。リルは眉を寄せた。

蹲るんじゃなかつた・・・

またため息を吐き、リルは自室に戻ろうと踵を返す。しかし、足が止まつた。

リルがまさに行こうとした方向に、異母兄がいたからだ。爽やかな笑みを浮かべ、リズは片手をあげる。

「探した。リル」

リズはそう言うと、まっすぐリルのほうへと行く。リルはぽかん、とその様子を見ていたが、ようやく今の状況は飲み込めたらしく、眉をつり上げた。

「なんで、ここに？」

温度のない声で冷たく言うリルに、リズは傷ついたような顔をした。

「リルが心配だつたからに決まつてるだろ?」

「その言葉なら何回も聞いたわ」

リルが屋敷を飛び出すようにエクソシストになつた3年、その間にリズや両親から幾度となく手紙が届いていた。しかしリルはそれに返事をほぼ書いていない。

1年に一回だけ、リルは返事をかいていた。

「リル、エクソシストをやめる気は、ないんだね?」

「ないわ」

リルは、きつぱりとそう返し、リズから視線をはずす。リズは首を傾げて、リルの腕を掴んだ。

「!?

驚いたようにリルがリズを見上げると、リズは微笑んでいた。

「でも、定期的に家に帰つてこいよ。父さんも母さんも待つてるんだから」

「…………」

リルはうつむき、なにも言わなかつた。リズははあ、とため息をはいて、肩をすくめる。

「父さんなんて、毎日毎日蒼い顔してるだー。母さんも、ほほ毎日お前に手紙送つてるだろ?」

「でも・・・」

「絶対、帰つてこいよ」

リズははきはきとした声で、言つ。

「お前の帰つてくる場所なんだから」

「・・・・・・・わかつたわ」

リルはいまだ視線をリズに戻そつとしない。リズは不満げな顔をする。

「ねえ、リル」

「なによ」

リズはリルの腕を掴んだまま、離さない。

「リルは俺の前で笑うことつて、あんまないよね。レインレットの前では普通に笑うのに」

「・・・・・・・」

気まずいように視線をわざとらしくそらすリルの肩をもひ方の手で掴むリズ。

「笑つたら、この手を離してあげる」

「・・・・・じんのクソ兄貴・・・・」

リルは引きつった顔をして、低く呟いた。リズはリルの言葉に、一瞬息を詰める。

兄、と言つてくれるのか・・・

自然と顔を綻ばせる兄に、リルは冷たく吐き捨てた。

「なににやついてるの？ 気持ち悪い」

「今日は」に泊まろうかなー」

「「めんなさ」に「めんなさ」につー」

リズの言葉にリルは土下座する勢いで謝る。リズは悲しそうな顔をした。

「酷いなあ・・・リル・・・」

「・・・・は・・・ははは」

リズの言葉にリルは乾いた笑みを浮かべた。

「さあ、笑つたわよ！？ さつさとその手を離して帰りなさい！」

「え？ なに言つてるの？ 僕は手を離すといつたけど帰るなんていつないよ？」

「あ・・・」

リルは顔を引きつりせて、隣で朗らかに笑う兄の顔を殴りたい心境に駆られた。

「で・・・結局リズさん帰るんですね」

「うんー。君たちあした仕事だしね」

リズは爽やかに微笑んで、仏頂面の妹に手をふつた。

「じゃあ、また今度」

「今度はない・・・」

リルはリズを睨み、低く言う。レインは隣で苦笑した。

「まあまあ、リル」

「・・・最悪よ・・・せつかくの休日が・・・」

リルはやつれた顔をして、壁にもたれかかる。

なにせ今日はずっとリズに父と母の様子、最近あつたことを延々と聞かされていたのだ。

「まつたく・・・クソ兄貴は・・・」

そう言いながらも、リルの顔は穏やかだ。

レインは苦笑して、リルの頭にぱん、と手を置く。

「また、来てくれるといいねー」

「冗談じゃないわよ」

リルとレインの休日は、ある意味仕事よりつかれたものとなつた。

3 (後書き)

閑話リルの家庭内事情暴露編、完結しました。

次回からは第一章にはいります。そして第一章が終わつたら、ようやく序章が終わるという・・・。第一部からが本当の本編といふなんといつか・・。

昔、天使と神様が住む高原での出来事でした。

主神の妻に、双子の赤子が生まれたのです。

その名を、『セルフィーナ』と『ゼウス』といいました。

そして時はたち、次の主神を決める時がやってきました。

高原のほとんどの者は、セルフィーナに決まる、そう思っていました。

セルフィーナは幼い頃から誰もが認める力を持つていたからです。

天使のような美しさをもち、清らかな心をもつていたセルフィーナは誰にも好かれました。

弟であるゼウスは、いつもセルフィーナの後ろをついてまわり、とても仲の良い双子でした。

容貌は似て無くとも、ゼウスとセルフィーナはお互い、たつた一柱の片割れだったのです。

ゼウスも、セルフィーナには劣るもの、とても強い力を持ついました。

誰もがこの一柱を認めていたのです。

しかし、事件が起きました。

セルフィーナが、自分が主神になるために弟であるゼウスを殺そう

としたのです。

ゼウスはそれを見事撃退し、セルフィーナを高原で一番深い穴に落とし、封印の岩をその上において、セルフィーナを永遠にそこに閉じこめてしまいました。

主神は、ゼウスに決まりました。

嫉妬に怒ったセルフィーナは、残った力を使い、悪魔を造りました。

セルフィーナは『罪に穢れた女神』と言われ、今もまだ、悪魔を造り続けています。

これが、表の神話。

表の神話（後書き）

一部修正しました。

「いいか・・・」

吐息のような声が、闇に響いた。

風に揺れる金の髪。漆黒のマントが翻る。

リルは、ひとつ深いため息を吐いた。

「ぼつろぼりじゃない・・・」

「本当だねー・・・」

彼女の相棒、レインも思わず肯くほど、一人の前に建つて いる教会は寂れていた。

この教会は、異教徒の教会で、数百年前、国王の命によって滅ぼされたものである。今は世界全国が主神、ゼウスを崇めている。

「さてと・・・」

リルはフードをとり、前に進んだ。

「はあ？」

室内に、少女の声が響いた。

五月蠅 そうに顔を歪めて、リゼルグは口を開く。

「だから、とある教会に潜んでいる悪魔を倒してここ、といつてるんだ」

「…………だから、なんでその悪魔を追っていたエクソシストが退治しないのよ」

「負傷した」

「…………はあ……」

くつそ、と悪態をついて、リルは前髪を搔き上げた。レインは任務の資料を読んでいる。

「それで？ その教会は？」

「これだ」

リゼルグは写真を封筒から取り出し、リルに手渡す。それに写っていたのは、もう使われていないだらう、寂れた教会だった。壁には薦が伝い、庭には雑草が好き勝手に生えている。

「異教徒の教会だったものだ。そこに、悪魔が潜んでいる」

扉は耳障りな音をたてて開いた。当然中は暗く、明かりはない。割れていて、もはや色の区別もできないステンドグラスを通しての月光が、唯一の明かりだ。

リルとレインは足音をたてず、教会内に足を踏み込む。

月光が足下を照らす。リルは注意深く周りに気を配りながら、前に進んだ。すると、広場に出た。

円形の広場にはステンドグラスが連なった壁に、天井には、神話の一部であろう絵がある。

そして広場の中央には。

「え・・・・・？」

見慣れぬ女神の像が、月光に照らされていた。

「キシャアアアアアアアツツツ！」

甲高い、悲鳴のような声と共に、レインは後ろを振り返った。すんでの所で結界銃の引き金をひき、攻撃を耐える。

「悪魔・・・！」

レインは低く呟き、もつと方の手で退治用銃を構える。そして、躊躇なく引き金を引いた。

「ガアアアアアアアアアアアツツツ！」

悪魔の断末魔が、広場に響いた。リルは腰からルウ爺から受け取った試作品銃をとり、放つ。

瞬間、爆音が鼓膜をつんざいた。

弾は悪魔に命中していく、悪魔の腹には大きな穴が開いていた。

悪魔退治専門銃は、契約期間の短い悪魔 まだ助かる人間の身体に傷をつけない。しかし、契約期間の長い、もう助からない人間の身体は、その攻撃相応の傷がつく。もちろん、血もでるし、姿は人間だ。

悪魔は年若い男だった。無性器を生やした顔は驚愕の色にそまつていて、口からはとどめなく紅い液体がこぼれ落ちている。薄いシャツは乾いた血と、新たに、男自身の血が混じり合って、斑を描いていた。

「ぐ・・・あああ・・・」

口から悲痛の声が迸る。リルとレインはそれを、無表情で見つめていた。

悪魔はぎこちない動きで手を前に突き出すように動かす。しかしその手は前に出した瞬間、崩れた。地面に、腕だつた砂が次ぎ次ぎと流れる。

「・・・・・任務終了」

リルの声は小さかつたが、それでも妙に広場に響いた。

「そうだね・・・」

こんなことは、ほぼ毎日ある。悪魔と契約した人間はほとんどの確率で死んでいく。それは、教会が悪魔と人間の契約に追いついていないからだ。

エクソシストの仕事は、悪魔退治。しかし、世間から、ある一部の人間には『人殺し』と言われているのだ。

それは、いくら悪魔だからといって姿は人間なのに躊躇なく銃をむけ、うつからだ。悲鳴を聞いても、何度ももうつ。悪魔が死ぬまで。

「主神ゼウスの名のもとに、悪の禍々しき魂を救済します・・・」

リルはそう言つと、その場に崩れるようにして膝をつき、悪魔だった、人間だった砂に祈るように手をあわせ、瞳を閉じた。レインも、同じように手を合わせる。

「どうか・・・安らかに」

しばらくそうして沈黙が広がっていた。

リルは目を見開き、顔をあげる。それと同時にレインが銃先を女神の像の真正面にあるステンドグラスに向けていた。

「誰・・・・？」

リルが、ステンドグラスを睨む。逆光で顔は見えないが、シルエットからしてリルたちより年上の男だろう。音もたてずにその男は飛び降りる。

「ようやく、逢えた・・・・。セルフィーナ・・・」

男の声が、響く。

リルは目を見開いた。

『セルフィーナ』

その名を自分は、いや、教会関係者や神話に詳しい人物は知つているだろう。

罪を負つた女神の名

「これ、は・・・」

レインもリルも、思わず目を見開いた。悪魔に気をとられて気づかなかつたが、天井に描かれている絵は　セルフィーナが閉じこめられている絵だつた。そして、中央にたつてゐるこの女神の像は。

「セルフィーナ神・・・？」

リルは掠れた声で言う。

だつて、ありえない

その像には確かにセルフィーナ神と名が刻まれていた。が、その像の顔は、間違いない。古びていてもわかる。

レインは息をつまらせた。

「 リル？」

その像の顔は間違いなく、リルディウス・ローズだった。

「 よつやく、気づいたのか」

男の呆れたような声が聞こえた。リルとレインはまだ状況が飲み込めず、呆然としている。

そのため、男がすぐ近くまで迫つてきていることに気づかなかつた。

「 つー？」

リルとレインはほぼ同時に後ずさる。男の顔がこのころになつてよ

うやくわかった。

綺麗なルビーの瞳。風に揺れる白い髪は、ざんばらで肩に届くか届かないかぐらい。

リルとレインより白い肌は、人間のものとは思えないほどだつた。

「俺の名は、アーシャル。時が満ちた。あなたを迎えて来たよ、セルフイーナ」

『絶対に、私は

』

男、アーシャルの言葉にリルは目を見開いた。耳に違う、自分と同じだが、どこか雰囲気がちがう声が重なる。

「あ・・・んたは・・・」

「ああ。まだ『覚醒』してないのか」

アーシャルはすこし以外そうな顔をして、顎に手をあてた。

「ふーん・・・」

そしてふと、リルよりすこし手前にいるレインを視界にとらえた。しかし、そのルビーの瞳は驚愕に彩られ、これでもかと見開かれる。

そして、形の良い唇が弧を描いた。

「ふ・・・はははははははは！」

身体をくの字にして、アーシャルは笑つた。その瞳はいかにも滑稽そうに、しかし憎悪のこもつた色に染まる。

「はははははははは！傑作だ！教会め・・・よりにもよつて、こいつとつ！」

アーシャルの視線はレインをとらえたままだ。レインは困惑のこもつた眼差しで、アーシャルを見る。その様子がおもしろかったのかアーシャルはまた笑い、訳がわからない、といった顔をしたリルをみて、また笑つた。

「今のあんたら二人じゃあ、わからないよな。意味が」

アーシャルはリルとレインに背をむけ、音もなく跳躍した。

「でも、近いうちに、必ずわかるぜ。意味が」

その言葉を残して、彼は消えた。

寂れた教会には、状況が飲み込めない一人が残された。

月光は、女神を照らし続ける。

これが、これからおこる事すべての、始まりだった。

2 (後書き)

ようやく、物語が動き始めました。

リルとレインはその日の夜、急ぎ足で教会に帰った。

異教徒の教会は王都のはずれにあった。教会とだいぶ距離があるが、エクソシストの足だと、すぐつく。

屋根の上を転々と走りながら、リルはアーシャルに会つてからやまない頭痛を耐えていた。

セルフィーナ

「・・・・・」

リルは顔をゆがめ、首を左右にふり、前だけを向くよつて顎をあげた。

「それで、その男は？」
リゼルグの問いかに、レインは首を左右に振る。

「すみません・・・」

「そうか」

リゼルグは額に手をあて、なにか悩むような顔をしていたが、顔をあげた。

「わかった。もう部屋に戻つて良いぞ二人とも」

「はい」

レインだけ返事をして、リルは一礼しただけで無言で部屋に帰る。

二人は軽いあいさつをして、それぞれの部屋に戻つた。

リルはベットに倒れ込み、瞳を閉じる。

まるでこわれたビデオのように、白黒の世界が、目に広がつた。しかしそれは雑音まじりで、しかも途中どぎれどぎれで、よくわからぬ。

セフイー・・・

愛してゐる、愛してゐる

セルフイーナ、愛してゐる

ただ、呪文のようにこの言葉が脳裏に響いた。
リルはなぜかあふれ出す涙に心惹かれる。

愛していた

愛してた

でも

でも

私は

そこまで世界は終わる。

それ以上は見ては駄目だとサイレンが頭に鳴り響く。

それは、決して忘れてはいけない、記憶。

それでも『私』は、どうしても、どうしても、消したかった。

「い・・・や・・だつ・・・・」

思い出したくない、思い出したくない。

涙が次々と頬を伝い、シーツを濡らした。

『』

ええ、私も愛してるわ

そう、言いたかったのに。

リルは、ベットに寝ころんだまま、天井を見上げていた。顔はいつもより白く、目は赤くなっている。昨日から泣き通しで、一睡もしていなかつたのだ。

ただ空を見つめたままリルはいた。

「・・・・・・・・」

脳内に、映像が駆けめぐることはない。しかし、酷く頭が痛かった。

思い出したくない・・・

思い出したくない、だから封じた。封じた、なのに。

『私』は思い出そうとしている・・・?

耳鳴りがした。

顔を歪めて、リルは両耳を強く押さええる。心臓の音がやけに大きく聞こえた。

いやだいやだいやだいやだ!

だつて、この記憶は・・・つ!

「・・・・・はつ・・・・」

荒い呼吸を整え、リルはゆっくりと起きあがる。乱れた髪が少し視界を遮る。

鬱陶しげに髪を払いのけ、リルは洗面所へ足を急がせた。

「おはよう、リル・・・」

リルが洗面所を出ると同時に、レインが自室から出てきた。視線があい、レインは微笑んでいつもどうりあいさつをする。リルは同じくいつも通り答えようとした。

「ええ、おはよう。今日は早いのね・・・」

しかし、掠れた声しかでなかつた。予想通り、相棒の顔はすこし歪む。

「声に顔・・・泣いてたの?」

「・・・まあ・・・」

気まずそうに視線をそらすリルに、レインは眉を寄せた。手をのばし、指でリルの目元をなぞる。

「まだ、赤くなつてるから、もう一回洗つてきたほうがいいよ」リルは目を丸くして、レインを見つめる。

「泣いてた理由、聞かないのね」

「リルが話したくなつたらでいいよ。でも・・・」

レインはリルの頭を優しく撫でた。

「なるべく、一人で泣かないでね・・・」

なんでないてるの?

今のレインの姿と、幼い、初めて出逢つた時のレインの姿が被さる。

そういえば・・・・・

リルは苦笑して、相棒を見た。

初めて私が笑ったのは、レインと会つてからだつたなあ・・・

一番信頼している人。

これからもずっと、一緒にいるであろう相棒。

「それじゃあ、顔洗つてくれるわ」

「うん」

そう言つて二人はそれぞれの目的の場所へと行く。

「お、リルとレインじゃねえか」

食堂。いつもより遅かつたせいか、人が多く、すこし苦勞してリルとレインが席についた時、後ろから声がかかった。

振り返ると、そこには一人の青年がいる。

「あー。あんた生きてたの！？」

リルが驚いたように、その青年に声をかけた。

だいたい18くらいの年頃で、紺の髪に群青色の瞳をしている、がたいの良い、人懐っこそうな印象をうける青年だ。

「おうー。そういうお前らも生きてたのかー。いやあ、よかつたよかつた！」

「久しぶりです。ガルド」

レインは微笑んで、青年、ガルドに近寄る。

「あんたがいるってことは、リリアも？」

「おう。こるぞ」

「呼んだ？」

「うわっ！？」

ガルドは驚いたように数歩後ずさる。そこには、飴色の腰に届くくらいの長い髪を両サイド三つ編みにした、薄桜色の瞳をした少女がいた。大きい瞳はすこし伏せめがちで、優い印象をうける。しかしガルドとリリアも、レインとリルと同じ、エクソシストの制服を着ており、胸に光る十字架は銀だ。

リリアは5人いる女エクソシストのうちの一人である。

ガルドとリリアは、エクソシストの中で珍しい武器を得意としている。リルとレイン、その他のほとんどのエクソシストが使用している銃の形状をした悪魔退治用武器ではなく、短剣の形状をした武器を使用しているのだ。

二人はエクソシストになつて初めて会つたのだが、そのコンビネーションはリルとレイン同等である。

二人はリルとレインと同期で、仕事仲間で一番仲が良い。

「リリア！久しぶり！」

「久しぶり。リル」

リリアは相変わらずの無表情だが、その声は柔らかい。

「俺の時と態度が違うなあ・・・」

「いつものことですよ」

「レイン・・・敬語そろそろやめてくれよ。俺たち親友だろ？」

「そうだねー」

「うつわ、棒読み！酷つ」

俺にはリリアだけだよ、とつぶやくガルドにリリアは「気持ち悪い・・・」と冷たい声を返す。

それもスキンシップらしく、ガルドは「お前も酷つ！」とわざとらしく泣き崩れる演技までお見舞いしてくれた。

一番はじめにその様子にリルが吹き出し、続いてレインも吹き出す。そしてリリアも顔を背けて肩をふるわせた。最後にガルド自身が笑い、四人の間に笑いが包む。

リルの顔には偽りのない笑みがあり、それにレインが安堵を息を吐く。その様子に、ガルドが微笑んだ。そしてレインの肩に手をおき、引き寄せる。

「よかつたな。笑ってくれて」

「・・・ガルドには適わないな・・・」

レインは苦笑して、リルを見る。リリアと楽しげになにか話していた。

「よかつた・・・」

「後で、なにがあつたか話せよ。相談にのるぜ」

ガルドは少し心配げにそう言つ。レインはガルドの顔をまじまじと見た。

「本当に相変わらずですね」

レインは思わず笑う。

この友人は何年たつても変わらないだろうな、と思い、また笑いがこみ上げてきた。

「二人してなにを話してるの？」

いつのまにかレインとガルドの間にリリアがいた。ガルドは驚いたように目を丸くする。

「おーすまんすまん。飯くうか！」

しかしガルドは慣れているのか、すぐ元の調子に戻つて、朝食を注文しにいった。後に残つたレインとリリアは、お互に無言になる。沈黙を破つたのはリリアだった。

「リルの様子」

その一言に、レインはやつぱりな、と思つ。彼女が親友の異変に気づかないわけがないのだ。

「絶対、今度話してね」

「・・・うん・・・」

「私たち、今日任務入ってるから」

リリアは淡々とそう言うと、リルの元へ帰つて行く。

レインは息を吐き出し、そして、三人の元へ一步踏み出した。

深夜。闇と静寂が広がる、昼間でも暗い人気のない場所に、リルはいた。

気配を完全に殺して、リルは壁にへばりつき、いつでも敵が出てきても良いようにしている。

いつも通りの悪魔退治だ。深呼吸して、リルは銃を持つ手に力を込めた。

「・・・・・」

夜中の冷え切つた風がリルを包んでいる。コートを着ているからといつて、むき出しの足にこの風はきつい。エクソシストの制服は動きやすいことをメインに考えてあるもので、軽い。神官の女用服はロングスカートだが、エクソシストはそうはいかない。ロングスカートだと足が動かしにくいからだ。だからってなぜ足がむき出しに

なるスカートなのか、リルはこついう時一番苛立ちを覚える。

ロングブーツなので下はそこまで寒くないのだが、太もも部分が寒い。顔をしかめて、リルは思わず舌打ちしそうになった。

「・・・っ！」

長時間ここで悪魔を待っていたが、ようやく気配を察知した。

「・・・・随分と待たせてくれるじゃない・・・・」

リルはそう低い声でつぶやくと、立ち上がった。

リルは壁で身を隠すのをやめて、気配のするほうへ躍り出た。手には任務に行く前にルウ爺から貸してもらった試作品銃が握られている。

気配の正体は、まだリルより幼い少女だつた。

薄汚れた、所々破れたワンピース。むき出しの素足は細く、明らかに栄養が十分にとれていなことが安易に予想できるものだ。青白い肌は暗闇に異様に栄えて見えて、それが不気味だった。

黒く淀んだ半開きの瞳の下には闇をそのまま切り取ったような隈ができる。

まだそこまで悪魔化が進んでいない・・・

人間は悪魔と契約すると、日を追うごとに容貌はだんだんと悪魔に似ていく。まず、爪が黒く変色していき、伸びる。そして次は目が白くなつていくのだ。

この子はまだ助かる・・・！

リルの口元にわずかな笑みが浮かぶ。

銃の銃先を少女にむけ、うつた。

「ツ！？」

少女は弾をうけた瞬間、その場に崩れ落ちた。この試作品銃はあたつた瞬間、身体中に痺れが走る効果がある、とルウ爺が力説していた。

少女は崩れ落ちたがすぐ立ち上がった。身体中がふるえている。そしてそのまま踵をかえし、悪魔は逃げる。

リルは焦ることなく追いかけた。

「まちなさい！」

銃先を逃げる背中に向ける。

引き金をひくと、少女はすんどのところでよけ、弾は屋根を貫いた。不吉な音が響く。

その音にもリルは慣れたため、たいして気にせずにまた引き金を引いた。弾は少女をかすつたが、動きが速いため、また屋根を貫いた。

「・・・この・・つ！」

リルは顔を引きつらせて、走る速度を上げた。

いっきに少女との間合いをつめ、引き金をひく。弾は少女の額を貫いた。そこで、リルは目を見開く。

「ガア・・アア・・」

少女の唇から低いうめき声が発せられる。額から、紅の液体が次々と流れていた。

「なん・・で・・！？」

リルは一步後ずさり、少女を凝視した。悪魔化は全然進んでいない。なのに、なぜ。

人間の身体に傷が・・・！？

少女は大きい瞳をこれでもかと見開き、小さい口からとどめなく血が流れ出す。

そしてそのまま後方に倒れた。少女の身体は、砂になり消える。

『リル！？どうした？』

耳につけられているピアス型の無線機から、相棒の声がする。

『いま、どこにいる？』

相棒の声が遠くに聞こえる。リルはその場で座り込んだ。

その時。

「やあ、セルフイーナ」

風が、消えた。

リルはゆっくりとした動作で後ろを振り向く。そこには、あの異教徒の教会で会った、青年がいた。

純白の髪。ルビーの瞳は異様に暗闇で怪しく光っている。

「あんた、は・・」

リルは、目を丸くして、青年、アーシャルを見た。

「アーシャルだ。もう忘れたのか？」

楽しげに笑いながら、アーシャルはリルと目線を会わせるようにかがんだ。

「セルフイーナ」

懐かしむように、アーシャルは女神の名を紡ぐ。

「・・・・人違ひじやないの？私はそんな名前じやないわ」
リルはアーシャルを睨む。酷く頭が痛い。まるで強く殴られ続けているような。

『アーシャル！』

自分と同じ声で、目の前の男の名を呼んでいる脳内の映像が、脳裏にちらついた。

アーシャルはそれに気づいているのか、いないのかわからないが、また愉快そうに笑う。

「いいや、お前はセルフイーナで会ってるんだ。まだ覚醒していいだけ」

だから、とアーシャルは続ける。

「覚醒させてやる

そつ言つて、アーシャルのでかい手がリルの視界をおおつた。

「・・つ！？」

なぜかリルはその手をはじくことができなかつた。心の中でそれを

強く望んでも、身体が言つ」とを聞かない。

「・・・今、思い出させてやるよ」

悲しみに彩られた記憶を。

アーシャルは眉間にしわをよせて、そう呟いた。

自分の心臓の音しか聞こえない。

リルは目を見開いた。目の前にはただ闇が広がっていて、暑さも、寒さも、痛さも、なにも感じない。

そんな静寂の空間で、リルはただ一人、たつていた。

「・・・あ・・・・」

リルはその場にへたりこんだ。いや、感覚がないため、自分自身、さきほどまでたつていたのかもわからない状態だ。

記憶を手繰りよせ、今まで自分がなにをしていたのかを懸命に思い出そうとする。

覚醒させてやる

弾かれたように、リルは顔を上げた。

「！」は・・・？」

思い出した。

自分は、アーシャルにわけのわからないことを言われてそこから、わからない。

なにがおきたかも、覚えていない。

「どこの？」

あたりを見回す。しかし、闇と静寂が広がっているだけで、なにもわからなかつた。

その時。

『リル！』

どこか遠くから、聞き慣れた相棒の声が響く。その声は焦りを含んでいて、リルは思わず笑つた。

きっと相棒はとても焦つた、困つたような顔をしているのだろう。

安易に想像がつく。

そして、リルは振り返った。

そこだけ、ぽつかりとした穴がある。

「・・・？」

その穴をのぞき込むと、想像通りの相棒の顔があつた。

「レイン・・・」

リルはその穴に手を伸ばそうとする。が、それは寸でのところでなにか見えないもの弾かれた。

リルは眉をよせ、穴を見る。相棒の顔は怒りで染まっていた。

「レイン？」

なにを怒っているのか、リルにはわからない。隣に、気配がした。視線をやると、そこにはアーシャルが起立している。

「アーシャル・・」

掠れた声で名を呼ぶと、アーシャルが驚いたようにこちらを見るのがわかつた。

「あの男は、お前が気を失っているから怒つたんだよ」

アーシャルは楽しげに笑う。

「よほど大切なんだな。お前が」

そう言つたアーシャルの顔は、声は、どこか悲しげに思えて。リルは思わずアーシャルを見つめた。

「世界でたつた一人の相棒なんだもの。一番信頼しているから。あたりまえでしょう」

その答えに、アーシャルのルビーの瞳は見開かれた。

そして次には低い笑い声が響く。

「ははっ・・・本当に、傑作だな。『一番信頼している』、か」教会もなめたまねをしてくれる、とアーシャルはわけのわからない言葉を言い、リルを見た。

「お前を覚醒させる」

アーシャルの姿は、だんだんと闇に飲み込まれていく。

「つらいだろうが、我慢しろ」

その言葉には労るような響きが含まれていた。リルは首を傾げる。

「あなたは、私の敵なの？」

リルの問いに、アーシャルは一呼吸あけて答えた。

「味方だよ。なにがあつても」

次の瞬間には、闇ではなく新緑があたり一面に広がっていた。
リルはあたりを見回す。すると、隣に人が立っていた。

いや、人ではない。

だいたい6、7歳頃の年頃の少女は、野原の中一人で空を見上げていた。その空は雲一つない、美しい青空だった。リルの知っている世界ではそうそうみれないくらいの。

そしてなによりリルが驚いたのは少女の容貌だ。

少女は腰より長い金の髪に、大きい青の瞳をしていた。肌は白く、華奢な手足はすこし力をいれて握れば、簡単に折れてしまいそうだ。

その顔は、リルと瓜二つ。

「この子がセルフィーナだ

リルは直感的にそれを悟った。

少女、セルフィーナは空をただ見上げていて、それだけで楽しいのか表情は微笑を浮かべていた。

「セフィー！」

背後から、まだ幼さの残る少年の声が聞こえた。

セフィー、とはセルフィーナの愛称だ。リルはその呼称になぜか酷く懐かしさを覚える。

「ゼウス！」

セフィーは花が咲くような笑みを浮かべ、振り返った。

背後には、漆黒の、闇の色をした髪に、紫水晶の瞳をした少年がいた。リルは瞠目した。

その顔は、レインとまったく同じだったのだ。
ゼウス、それはリルたちが崇める主神。

セルフィーナの双子の弟だ。

「みて、ゼウス！」

セフィーはゼウスに駆け寄り、手にもつっていた淡い水色の一輪の花を差し出す。

「綺麗でしょ？さつきそこで見つけたの！」

「本當だ！母様に見せたら喜ぶよ！」

一柱は幸せそう微笑み合い、一緒に花を摘みに行く。

その姿はとても仲の良い普通の姉弟だった。

リルはただ一柱の後をついていった。

さつきまでの一連の様子に、一柱にはリルの姿は映っていないといふことがわかつたので、対して隠れることもせず、普通に一柱の後についていく。

二柱が花をつみ、母親らしき女性に花を渡すところで、リルの視界はまた闇に包まれた。

そして場面が変わり、セフイーの姿はリルと同じぐらいになつた。

まるで鏡を見ているようで、リルはすこし気分が悪くなる。

なんでここまでそつくりなの！？

訳がわからず、セフイーを見つめる。

セフイーとリルの目があつた。リルは一瞬息をつめたが、すぐに自分が見えないのだと思いだし、胸をなで下ろす。

「ゼウス！」

セフイーの嬉しそうな声が耳に響いた。自分とまったく同じの声。

セフイーの視線を辿ると、そこにはレインが
レインとま
つたく同じの姿をしたゼウスがいた。例外は髪の長さぐらいだ。レ
インは肩に届かないくらいだが、ゼウスは肩より少し長い髪を耳元
でくくっている。ゼウスはセフイーを見て、微笑んだ。

「セフイー、どうした？」

ゼウスはセフイーの頬に手をあて、愛おしげに優しく声をかける。
容貌が容貌なので、リルはとても複雑な気分になつた。

「ゼウス・・・もうすぐよ。もうすぐ、主神が決まるの」

セフイーの言葉に、ゼウスの息はとまつた。それを察知して、リル
は怪訝な顔をする。セフイーはそれにすら気づいていないのか、今
にも小躍りしそうなくらい嬉しそうに話していた。

「誰がなるのかしら！」

セフイーは、周りが話していることをしらない。

『主神はセルフイーナになるだろ』

セフイーはきっと、主神になつた者に一生仕える心つもりでいるの
だろう。そしてただ純粹に、誰になるのかが知りたいに違いない。

「ゼウスがなるかもしないわよ？」

悪戯な顔をして、セフイーは微笑む。ゼウスは精一杯の微笑みを返した。

「やうだな・・・」

リルはなぜかその言葉に不吉な感じを覚えた。
胸騒ぎがする。

そしてまた場面が変わった。

「セフイー！」

ゼウスの焦ったような声が響いた。
今度の場面は室内だった。

「ゼウス・・・？」

セフイーの、困惑した声。

ゼウスはセフイーの細い、華奢な身体を強く抱きしめていた。

「セフイー・・・愛している・・・」

その言葉に、セフイーの肩が震えた。リルはなぜか涙を流す。
止まらない。

悲しい、とても、とても、とても、

あなたは私を愛してくれた。

でも、私は

「私は、あなたの姉なのよ・・・ゼウス。そしてあなたは私の弟
なの・・・」
だから

「私は、あなたの想いに応えることはできない・・・」

そう言いつと、ゼウスは悲しそうな顔をして、部屋をさつた。残されたのは、悲しげに瞳を伏せるセフィーと、泣いているリルだけ。

セフィーの瞳から、涙があふれた。

力なく崩れるセフィーは、細い肩をふるわせ、泣いた。

ごめんね

ごめんなさい

でも

でも

私はあなたの『姉』だから

ゼウス、ごめんね

でもいえないの

私は、あなたを

リルは、セフィーと同じように泣いた。嗚咽を繰り返し、ただただ泣いた。なぜか悲しかった。自分のことではないのに。悲しかった。

ゼウスはセルフィーナを愛していた。セルフィーナも、ゼウスを愛していた。

リルがようやく泣きやんだ頃、セフィーは泣き疲れてすでに眠つた後だつた。ベットの上で眠る少女の姿は本当に自分とそっくりだ。リルは泣きはらした赤い瞳で、セフィーは見つめていた。神話通りのことが起きるなら、セフィーは目を覚まし、そしてゼウスを殺そうとする。

しかし、セフィーを見てきてリルはそれを信じられなかつた。

だつて、彼女は、ゼウスを愛しているのだ。どうして殺せよつか。

「・・・・」

沈黙が広がる。リルは俯いて、時が過ぎるのをまつた。

いくらたつた頃だらうか。足音が聞こえた。それはだんだんとこちらに近づいてくる。

誰・・・?

リルは振り向き、足音の正体を見ようとドアノブに手を伸ばす。が、ドアノブはリルの手をすり抜けた。いや、リルの手がドアノブをすり抜けた。

触れもしないのね・・・

リルは自分の姿を見下ろし、嘆息する。すると、ドアが開いた。部屋に入ってきたのは、ゼウスだつた。その顔は無表情で、恐ろしさを感じる。

ゼウスはセフィーに近寄り、肩を揺さぶる。

「ん・・・?」

セフィーは瞼をゆっくりとあけ、そしてその視線はゼウスをとらえるまで時間をかけなかつた。

「ゼウス?」

セフィーはしつかりとした声音で弟の名を呼ぶ。ゼウスは微笑して、頷いた。

「ああ。 そうだよ」

セフィーは起きあがり、立つた。

「どうしたの？ こんな時間に・・・」

明日はいよいよ主神を決める日だ。なのに、なぜ。

ゼウスは微笑んだまま、徐に片手をあげ、力をこめて氷の刃をつくりた。それは、ゼウスもセフィーも同等に使える力だ。

ゼウスはそれをまっすぐ、自分の腹部にさした。といつても、浅くだが。

セフィーは瞠目し、息をつめる。

「なにを・・・！？」

驚いて、セフィーは傷口に手を伸ばす。その時。

「クララ！」

ゼウスは自身の側近の名を呼んだ。側近と主は契約を結んでいて、名を呼べばどこにいても必ず主の元へ召還される。

「セルフィーナ神・・・どういうことですか」

側近であるクララは、ゼウスとセフィーを見比べ、低く呟いた。ゼウスの手につくつてあつた刃はすでない。そしてセフィーの傷口にのびた手は傷を治そうと集めた力が漲っている。

端から見たら、セフィーが今までにゼウスに害をなそうとしているところだ。

「セルフィーナは我を殺そうとした！ 自分の利益のために！」

ゼウスの浪々とした声が、室内に響く。

「大罪ですぞ・・・！ セルフィーナ様！」

クララは心痛な面持ちで、セフィーを見る。セフィーは手を握りしめた。

「違います！ 私は

「

セフィーが言い終わらないうちに、ゼウスは手に力をこめて、セフィーにはなった。セフィーは目を見開き、倒れる。

「いくぞ、クアラ」

「はつ」

ゼウスは側近を連れて、一番深い、と言われている穴にセフィーを落とした。

リルは目を丸くして一連の事件を見ていた。また目の前が真っ暗になり、そして次の瞬間には、隣にセフィーがいた。闇と静寂、そして寒さに包まれた空間で、セフィーは上を見ていた。

「ゼウス・・・」

セフィーは弟の名を掠れた声で呼ぶ。応えは返ってこない。リルは眉を寄せて、セフィーを見ていた。セフィーの顔には、憎しみがない。逆に悲しげな瞳をしている。リルも、普段ならば激昂するだろうが、なぜか怒りがわいてこなかつた。

なんで

なんで

そういうふた想いしか、わかぬのだ。

そんなことを考えていると、頭上から声がした。

「セフィー」

「ゼウス！」

セフィーは弾かれたように立ち上がった。

「ゼウス！ここから出して・・・」

「いやだ」

「なんで！」

セフィーの悲鳴のような声に、ゼウスは動じず淡々と返した。

「お前は俺のものだ。セフィー」

「・・ゼ、ウス・・?」

セフィーの困惑した声が穴に響く。

「お前を主神になんかさせない。俺のものだ」

そういうとゼウスは、小さく笑った。

足音が遠のいていき、セフィーは一柱になつた。頬を伝う涙をぬぐいもせず、呆然とセフィーは穴を見つめている。

「ゼウス・・・」

こんなことをされても

それでも

あなたを憎むことなんてできない

「セルフィーナ神」

上から男の声がした。感情のこもっていない、青年の声。穴の上からおいてある岩から、青年の顔が透けて見えた。白い髪に、ルビーのような瞳。

「あなたは?」

セルフィーナは、小首をかしげて、問つた。青年は無表情なまま、淡々と返す。

「お前の監視役、アーシャル。ゼウス神に造られたものだ」「アーシャルっていうのね。初めまして。知つての通り、セルフイーナよ」

昔と変わらない笑顔を浮かべるセフイーを、アーシャルは無表情で見ている。

「なんで、笑つていられる？こんなところに閉じこめられて」「だつて、憎くないもの」

セフイーはさらりとそう返して、微笑んだ。

「私はずっとここにいても、それでもいいわ」「なぜだ？」

一呼吸の暇もなく、アーシャルの問い合わせかかる。セルフイーナは、ゆつくりと、噛みしめるように言つた。

「大好きだからよ。アーシャル」

誰が、とは言わずともわかつた。

自分をここに落とし、そして永遠に閉じこめようとしている張本人を、大好きだと、そう言つたのだ。

「・・・理解できないな・・・」

アーシャルは思わずそう呟いた。その呟きが聞こえたのか、セルフ

イーナは鈴が鳴るかのようにな笑う。

「いつか、あなたもわかる時がくるわよ。世界で一番愛おしいと想えるような人ができたら」

「・・・しらん」

アーシャルはそっぽを向き、それきり黙つてしまつた。セルフイーナは何度かアーシャルに話しかけていたが、いつのまにか話しかけるのをやめていた。

アーシャルが視線だけセルフイーナにやると、彼女は規則正しい寝息をたてていた。

「団太いやつ・・・」

アーシャルはそう呟き、空を見上げる。
その空は憎らしいほど綺麗な青空だった。

目の前がまた暗闇に包まれた。リルは力なく座り込んだまま、ぼつ、とただ前を見つめていることしかできなかつた。

私たちが今まで信じてきたものは・・・

リルは自分の手を見る。細く、白い指先はかすかに震えていた。

偽りだつたの・・・？

リルは両手で顔を覆う。涙なんて出なかつた。心にあるのは絶望だけ。

あの異教徒の教会は、セルフィーナを崇めていたものだつた。両手をゆっくりとさげ、リルは前を見る。暗闇に光がさした。

隣には変わらず、セルフィーナがいた。その姿はだいぶ大人になつていて、20代ぐらいだろうか。髪はもう身長くらいの長さで、ずっと閉じこめられていたにも関わらず、セルフィーナは美しさを保つていた。その顔は安良かな寝顔を浮かべている。

徐に、瞳があいた。

「・・アーシャル！」

焦りの含んだ声が、名を呼んだ。

「セフィーー」

アーシャルはすけた音^{ノイ}でわかるほど焦つていた。リルはアーシャルがセルフィーナの愛称を呼んでいることに驚く。

「ゼウスが・・・恐ろしいものを・・！」

セルフィーナは顔を真つ青にして、肩を震わす。アーシャルはその

言葉に頷いた。

「この禍々しい気配……」

リルはここでようやく気づいた。先ほどから感じる気配、それは、間違いなく『悪魔』のものだつたのだ。

まさか、悪魔を造つたのもゼウス神だつたの！？

驚愕に彩られた顔で、リルは一人の会話を聞いている。

「セフィー……大丈夫か？」

アーシャルの気遣う声を聞き、セルフイーナは真剣な面持ちでアーシャルを見上げた。

「アーシャル……」

「なんだ？」

「ここからでるわ

セルフイーナの言葉に、アーシャルは目を見開く。

「な……」

「ごめんね。でも、これは赦せないの」

禍々しい気配が、人間界に降り立つた。

自分が傷つくのはいい。それでゼウスの心が晴れるのならば、それでいい。

この行動の理由は知つていていたから、それでいいと思つていた。けれど

「身体を消滅させて、魂を人間に定着させるわ」

それは人間達のいう転生。

「そして、悪魔を倒す」

「だがあ前だけの力で……」

「悪魔を倒す技術を、人間に教えるのよ。そして身体の寿命が終わつたら、また別の器に入るわ」

「しかし……」

「大丈夫」

セルフイーナは微笑んだ。

「私は、ゼウスを倒す」

その一言は、妙に重く響いた。

「この手で、倒す。時がきたら、絶対に」

アーシャルは無言でセルフイーナを見つめた。

「その、時は・・・」

「私が・・・・」

セルフイーナは曇りのない瞳で、アーシャルを睨むように見た。

「完璧に戦えるようになつたら」

人間に転生することでだいぶ力を使う。そして、悪魔退治もしなくてはならない。

転生していき、完璧に力が回復したら。

「その時が、ゼウスを倒す時よ」

セルフイーナはそうい、立ち上がつた。

「さよなら、アーシャル」

「俺も・・・

そのまま、さよならと返すのかと思った。なのに思わず言葉に、セルフイーナは瞠目する。

「俺も、あんたと一緒にいるよ」

アーシャルはセルフイーナを見つめたまま、続ける。

「一緒に、ゼウスを倒す」

セルフイーナは泣きそうに顔を歪める。そして、俯いた。

「・・・・ありがとう」

それが、セルフイーナの最後の言葉だった。あの美しい姿は闇に消え、穴には誰もいなくなつた。

「時が、きたら・・・」

アーシャルの呟きだけが、穴に響く。

「思い出したか？」

後ろから、アーシャルの声がした。リルはゆっくりとふりかえり、アーシャルの姿を視界にとらえる。

「・・・真実なの？」

「ああ。こんな嘘をついてどうする？」

アーシャルはそういう、踵を返した。

「戻るぞ。あの男がうるさくてしようがない」

「あの男って・・・レイン？」

「そうだ」

アーシャルの姿は会話をしているうちにかすんでいく。

「ねえ、アーシャル」

「なんだ？」

「なんで、レインとゼウス神の姿は似てるの？私は生まれ変わりだから似てるんだろうけど。レインは・・・？」

「ゼウス神の生まれ変わりではない」

その言葉に、リルは安堵の息をもらした。

生まれ変わりでは、ない。

しかし

アーシャルは瞳を細め、口を歪ませた。

本当に、なめたまねをしてくれる・・・

アーシャルは舌打ちしそうになるのをじりと、拳を強く握りしめた。

仄かな蠟燭の明かりだけで照らされている長い廊下を、リゼルグは一人、歩いていた。見慣れた廊下だが、やはり通る度に緊張を伴う。目的地の前につき、深く息を吸い込むと、ドアノブに手を伸ばした。控えめな、ドアの開く音が響く。

「リゼルグ司教」

そこは、大司教の会議室だった。

真ん中にいる男、老人の声が響く。リゼルグは跪いた。

「教皇様」

大司教に囲まれ、中心に居座る人物、教会の最高権力者。

「顔を上げよ」

威厳にみちた声に従い、リゼルグは控えめながらも顔を上げる。

「報告は、本当なのだろうな？」

「はい。確かに」

リゼルグは淡々とした声で返した。教皇の、ほとんど白い眉が眉間にかかる。

「ならば・・・リルディウス・ローズを・・・」

まるで名を口にするのも忌々しいというように、教皇はそこでいつたん口を閉ざす。しかし、伏せていた瞳をあげ、教皇は再び口を開いた。

「リルディウス・ローズを、いきまく捕らえ、地下牢に閉じこめよ

！」

「つー？」

リゼルグは弾かれたように顔を上げた。その瞳は驚き一色に染まっている。

「・・・・どうこう」とですか・・?

「理由など必要ない。いますぐ、あの女を捕らえろと言つてているの

だ！」

「なぜ、そう急ぐのです！」

リゼルグは声を少し荒げた。その様子に、大司教たちと教皇は顔をしかめる。

「・・・そうか、お前は知らないのだったな」

教皇はそう呟くと、リゼルグをまるで睨むように見据えた。大司教は沈黙を守っている。

「あの女は、女神セルフィーナの生まれ変わり・・・・。そして、その相棒・・・・、レインレット・アルスは・・・・」

次に紡がれる言葉に、リゼルグは思わず息を止めた。

「リルっ！」

意識が戻り、リルは瞼を開けた。すると、目の前には見慣れた相棒の顔があった。

「レイン・・・？」

レインの顔に、さきほどまで見ていたゼウスの面影が重なる。リル

は悲しそうに顔を歪めた。レインはリルの身体を支えるように背に手を回し、前に立っているアーシャルを睨む。

「お前・・・・・リルになにをした・・！」

「別に、なにも？」

アーシャルは口元を歪ませ、レインを見据える。

「お前も、近々わかるだろうさ。

それじゃあな

アーシャルはリルを一瞥し、背を向け、その場から消えた。それを

レインは鋭い眼光で睨んでいる。

リルは呼吸を整え、レインの腕から離れた。

「もう大丈夫よ。ごめん、レイン」

リルは顔をあげ、微笑んでみせる。それにレインは微笑み返し、首を横にふった。

「ううん。全然、俺は大丈夫。リルの無事なようでよかつた」

「・・・・・私も、全然怪我なんてしてないし、大丈夫よ。さあ、教会に帰りますか」

レインはそつだね、と言い、立ち上がる。屋根から音もなく地面に着地し、リルとレインは足を急がせた。

教会に帰ると、門のところに数人の警備神官がいた。いつも2人しかいないそこに、5人以上の神官がこちらを見ている。リルとレインは首をかしげ、怪訝な顔をした。

「なんだ・・？あれ・・」

「なにかあつたの？」

神官の中心角であろう人物が、リルを鋭い眼光でにらみつけた。それに、リルは眉をよせる。

「とらえろ！」

低い声が、耳朶をうつた。次の瞬間には、リルとレインの周りは神官で囲まれる。

「なんだ！？」

「なんなの！？あんたたち！」

リルは神官を睨む。神官は冷徹な目をリルに向けるだけでなにも言わない。

「レインレット様はこちらに！」

「リルディウスを捕らえろ！」

レインの腕をひっぱり、リルを囲む。レインは目を見開き、自分をつかむ神官の手を振り払った。

「なんなんだ！？なんでリルが・・・！命令したのは誰だ！？」

レインは普段からは想像できないほど低い声で、神官に問いただす。神官は暴れるレインを押さえ込み、言った。

「リゼルグ司教からの命です。あなたはすぐに安全な場所へ」

「・・は・・・？」

レインは目を見開き、力なくその場に座り込んだ。

「離して！なんなの！？」

リルは暴れ、自分をおさえこむ神官を「ことごとく蹴散らしていく。しかし神官はリルを押さえる手をとめない。

「つ・・・！」

「リルディウス・ローズ！これはリゼルグ司教からの命だ！おとなしくしろ！」

神官の怒鳴り声に、リルは動きを止めた。それをきに、神官はリル

を無理矢理教会内に引っ張つていく。

なんで、リゼルグ司教がリルを・・・?

レインは田を見開いたまま、神官の手を振り払い、教会内へと走つていった。

リルは神官につれられるまま、歩いていく。薄ぐらい、しめつた牢があつた。その一つに突き飛ばされる。

「なにを・・・！」

神官はリルの困惑した声を黙殺し、足を急がせその場をさる。リルは鉄格子をにぎり、左右に揺らした。

「出して！出せ！」

鉄格子は見かけによらず頑丈で、リルの力でもびくともしない。

リルは窓から見える夜空を睨んだ。

どうなつているの！？

頭が壊れそうだ。先ほどまでみていた記憶がすべて嘘ならいいのに、
とリルは顔を歪ませて思った。

「リゼルグ司教！」

レインの怒鳴り声が響いた。大きな音をたてて扉が開く。そこには予想していた顔があつた。レインはあいさつもせずにその人物の前へ急ぐ。

「どういうことですか！？なんでリルが・・・！」

「落ち着け、レインレット」

リゼルグの低い声がレインの言葉を遮る。レインは眉をよせた。
「落ち着け・・・？相棒が理由もなく捕らえられたのに、落ち着いていられると思いますか！」

「その理由を今から話す！いいか、レインレット・・・リルディウスは・・・」

リゼルグは、レインを見つめた。

「リルディウス・ローズは罪に穢れた女神、セルフィーナの生まれ変わりだ」

リゼルグの声が、部屋に反響し、闇に消えた。

「・・・・どうこうことですか」

しばらくして、レインの呻くような低い声が落とされる。リゼルグは苦しそうに顔を歪めて、口を開く。

「リルディウスは、セルフィーナの生まれ変わりだ。そして、お前は・・・」

リゼルグはレインから視線をはずし、言つ。

「ゼウス神の、愛し子なんだ」

『愛し子』

それは神が地上 人間界に降り立つときの器のことと示す。神に選ばれ、神の加護を受けし者の呼称。ゼウス神の愛し子は、古くから教会に住み、大切にされている。愛し子の証は、まるで水晶のような紫の瞳をその身に宿す者だ。

「……教皇からの命だ……。レインレット、従え。我々の主神、ゼウス様の愛し子であるお前が、憎きセルフイーナに穢されたらどうする？」

その一言に、レインは皿を見開く。歯を食いしばり、俯いた。

「ふざけ……けるなつづー！」

レインは怒声と共に、リゼルグの胸ぐらを掴みあげた。

胸ぐらを掴む手は、あまりにもの怒りで小さく震えている。レインは目を見開き、リゼルグを睨んでいた。

「リルが、セルフィーナ神の生まれ変わり……？」

低いレインの、怒りをはらんだ声が響く。

それを向けられているリゼルグは無表情で、ただレインを見つめているだけだ。

「俺が、ゼウス様の愛し子……俺はそんなことが聞きたいんじやない。どうしてリルを拘束したのか、と聞いてるんだ！」リゼルグ司教つ！」

怒声は虚しく響いた。リゼルグは先ほどと変わらず、冷静な面持ちで口を開く。

「リルディウス・ローズが我らが主神ゼウス神の『敵』だからだ。そして、お前はゼウス神の愛し子……我々教会にとつて保護すべき対象だ。リルディウス・ローズがお前に攻撃するかもしれないだろ？」

その言葉に、今度こそレインの頭は真っ白になる。リゼルグの言葉がどこか遠くに感じた。

リゼルグの胸ぐらを掴んでいた手の力がゆるむ。数歩後ろに躊躇めき、レインは片手で目元を覆つた。

「……あんたちは……」

低い、怒気のはらんだレインの声にリゼルグは眉を寄せた。

「あんたちは、今までリルのなにを見ていたんだ！」

「……そういう問題じゃないんだ、レインレット」

リゼルグは下に目線をやる。

レインはリゼルグを睨み、口を開いた。

「じゃあ、どういう問題なんだ！？今すぐリルを出せ！」

激昂するレインをリゼルグはなだめるように肩に手を置いた。

「その望みは……叶えられない」

リゼルグは目を細めた。

「……すまない」

レインの腕は力なく垂れ下がる。

なにもできない

無力さに吐き気がした。

暗闇の中、リルは冷たい壁に身を預けていた。力なく両足は地面に投げ出され、その青の瞳は空虚を見ていたように濁っていた。

「……」

着ていたコートを膝に無造作にかけていただけなので、寒い。窓から見える月光で、からうじて自分のおかれている場所がわかる程度だった。指先がかじかんで動かなくなつたら困るので、時たま指を動かす。

服から伝わる壁の冷たさに身震いする。

不思議と、助けて、という思いは抱かなかつた。ただ、やはり、といふ思いが脳に染み込んでいく。

「セルフイーナ……」

掠れた声で、リルは自身の前の名を囁いた。

コートを握る指に力を込めた。

このままここに閉じこめられるなんて、[冗談じゃない

窓から見える満月をリルは睨んだ。

「レインっ！」

焦った声音が自分の名を呼んだ。

レインは声のしたほうを振り返る。そこには声通りに、顔をしかめたガルドがいた。隣には、唇を噛みしめたリリアがいた。

「ガルド・・・・・リリアさん・・・」

レインは霸氣のない声で友人の名を呟いた。ガルドは眉を寄せた。

「お前・・・・どうしたことだ？」

ガルドの質問に、レインは顔を歪める。リリアが一步前に出た。レインの瞳を睨むように見据え、リリアは口を開いた。

「リルは、どうしたの？」

怒氣の波乱だ声に、レインの肩は一瞬びくついた。

「どうしたの？」

返答のないレインに、もう一度リリアは噛みしめるように聞いた。

「リルじや、はなせない」

よつやく出た言葉に、リリアは眉を寄せたが、すぐに口を開いた。

「じゃあ、あなたの部屋に行きましょつか」

部屋につき、レインはうつむきながらも、ガルドとリリアにリルのことを話した。話している間、ガルドもリリアも無表情だった。話しあり、レインは顔をあげる。ガルドは顔をしかめ、リリアは鋭い眼光でこちらを見ていた。

「・・・・・なるほどね」

リリアの呟きのような声は、部屋に重く響く。

「リルが、『罪に穢れた女神』の生まれ変わり・・・」

ガルドの言葉に、レインは頷く。

「あの教会で見た女神は・・・リルと瓜一いつだつた・・・」

穏やかに笑みをたたえたあの像が脳裏をよぎり、レインは歯を食い

しばる。

「・・・おそらく、リルはもう一生涯、命がつきまるまで牢から出られないでしょうね」

リリアは淡々と続ける。それがいつそう恐ろしく思えた。

「その・・・アーシャル? という男が、リルに接触したから、リルは捕らえられたんでしょう? 教会側にとって、それは危険だつた・・・」

「なんでだ?」

「あなた、話聞いてた? 教会ははじめからリルがセルフィーナ神の生まれ変わりと知つてたのよ。レインがゼウス神の愛し子だと知つていたように。ではなぜ、今までリルは捕らえられなかつたのか? 答えは一つ。アーシャルという男がリルに接触したからこれしか考えられない」

「なんで、初めからリルがセルフィーナ神の生まれ変わりつて気づいてたんだ?」

「そんなこと知るわけないじゃない」

一言でガルドの質問を切り捨てる。ガルドの顔が引きつった。

「どう考えないと理屈が合わないのよ」

「・・・どうすれば、リルを助けられるんだ・・・?」

レインは両手で顔を覆う。

「くそつ・・・!」

「・・・あなたが今なにをしても、リルの立場が余計悪くなるだけよ」

リリアの言葉にレインの瞳が凍り付く。

「・・・俺は・・・!」

苦しそうに言葉をはき出すレインを、リリアとガルドはただ見つめるだけだった。

「アーシャル」

風が、吹いた。

金の髪が大きく翻る。リルはまっすぐ、窓を見つめていた。
いつのまにか、窓に腰掛けている人物がいる。

闇の中でも光る瞳は、鮮やかな真紅。口端をつり上げ、男は笑う。

「 決めたか」

リルは一度目をふせ、そしてあげた。深い青が、アーシャルを射抜く。

「ええ」

アーシャルは無言で、リルに手を差し延べる。リルはそれを一瞥し、深呼吸をひとつすると、自身の手をのばした。
ふたりの手が重なる。

「 よつやく、時が来たな セルフイーナ・・」

アーシャルの、心底安心したような、嬉しいような響きをもつた声
音が、リルの耳朶をうつた。

あの子と初めて逢ったのは、まだ10もいってない頃だった。

「なんでないてるの？」

舌足らずな声で、少年は聞いた。

公園。いつも遊んでいるその場所に、見知らぬ少女が蹲っている。胸より長い金の髪をしたその少女が、ゆっくりとこちらを向いた。その青の大きい瞳からは、確かに涙が流れていた。

「なんで、ないてるの？」

少女と目線を合わせるより、少年はしゃがんだ。そして頬から伝い落ちる涙をぬぐおうと、手を伸ばす。

「つかわらないで！」

少女は、少年の伸ばされた手を慌てて手ではじいた。少年は驚いたように紫水晶のような瞳を見開く。

「あ・・・、」めん

手を引っこめ、少年は少女に笑いかけた。

「ぼく、レインレットっていうんだ！きみは？」

「・・・・・リルディウス」

渋々といった体でリルは答える。

レインは嬉しそうに、リルを見た。

「そつかあ・・・よろしく！リル

「いきなりあいしょうなの？」

「じゃあぼくのことレインって呼んで

レインは立ち上がると、リルにむかって手をのばした。

「・・・・・レイン・・・

「うん！」

レインは元気よく返事を返した。リルは、伸ばされた手に、途惑い

ながらも自分の手を重ねた。

自然と、いつのまにか泣いていなかつた。

「なんで、ないてたの？」

先ほどと同じ問いを、レインは口にする。リルは顔を伏せる。唇を強くかんだ。

「・・・わたしは、いらないこの」

「そんなことないよ！」

レインは顔をしかめる。リルは瞪田した。

「この」・・・リズディアスと同じこといつてる・・・

「・・・でも、かあさまはそういうもの」

「なんで？」

不満そうに、レインは問う。リルはおずおずと口を開いた。

「わたしは・・・おとこの」じやなくて、あたまもわるいから・・・リズディアスにはなれないから・・・」

問題を解く時間が遅かつたときの、母の顔が脳裏をよぎる。顔を赤くして、眉を吊り上げて、高い声で怒鳴る母。

暴言と暴行の数々。リルは笑つたことがなかつた。自分のおかれた状況がつらいとも思わなかつた。でもやはり、母に罵倒されるのが、どうしても悲しい。愛されたかつた。

「リズディアス？」

「・・・わたしの、かあさまのちがうおにいちゃん」

おにいちゃん、という単語をいつのが怖かつた。自分にはその資格がない気がするから。だから、今言つときも、変に心臓がはねた。

「・・・リルは、リルだよ」

「え？」

母のことを思い出し、また泣きそうになつたリルに、レインは言つた。

「リルのおにいちゃんはリルのおにいちゃん。ぼくもぼく。リルもリルだよ。リルはいらなくなんかない。だつて、リルがきょうじこ

にいたから、ぼくはリルとあえたし、ともだちになれたよ
一生懸命言葉を探して言い募るレインに、リルは驚いたような顔を
向けた。

「・・・・・ ありがと」

顔が綻びた。リルはその時、生まれてはじめて、リルは笑った。

「・・・うん」

レインもつらうて笑う。

その後、二人は頻繁に公園で会い、いつしか共にエクソシストへの道を歩むことになる。

なにかが割れる音がした。

レインは弾かれたように顔を上げる。もうそろそろ寝ようとして、ベッドに横になった時だつた。

「なんだ!?」

窓を開け、外を見る。すると、リルが監禁されている牢のある棟の壁に大穴があいていた。

大穴の中心に、なにかいる。

夜のため、よく見えない。目を細めて、レインは身体を窓から突き出すようにしてそれを見た。

暗闇でもわかる紅い瞳が、こぢらを見る。

「…………つー?」

レインは慌てて部屋を飛び出し、外に出た。棟の周りには警備神官が囮んでいた。それをかき分けるようにレインは前に進む。

「レインレット様!?」

神官の中に、リルを捕らえた者がいた。制止の声を黙殺し、レイン

は進んだ。

「よお、また会つたな」

前に出ると、そこには予想していた人物がいた。

「・・・アーシャル」

記憶を掘り起こして、名を呼ぶ。アーシャルは笑つた。

そのアーシャルの後ろで、影が動いた。その影に、月光が降り注ぐ。「・・・リ、ル・・・」

アーシャルは、リルを護るように立ちはだかった。リルの顔は、俯いていて見えない。レインは歯がゆそうに顔を歪めた。

「そこ、通させてもうぜ?」

アーシャルは手を伸ばし、口元を歪めた。その言葉と同時に、レインたちは吹き飛ばされた。警備神官のほとんどは気絶している。レインと数人が、立ち上がつていた。

「リルを、どこへ連れて行く気だ」

レインの低い声が響く。アーシャルは愉快げに笑つた。

「ここより安全なところだ。本来セルフィーナがいるべき場所だ」「ふざけるな!」

レインの怒声をアーシャルはおかしそうに笑い飛ばす。

「ならなんだ?ずっと、命がつきるまで永遠にここに閉じこめさせておいた方が、お前はいいのか?」

その言葉に、レインは息をつめる。が、すぐにアーシャルを睨んだ。

「そんなわけないだろう!」

「でも、お前じゃあこいつを助けてやれない。俺は、護れる。だいたいなあ」

アーシャルの声音が冷気を含んだものに変化した。

「お前が、そんなこといえるのか?ゼウスの愛し子が」

レインは唇を噛みしめた。拳を力いっぱい握る。

「それじゃあ、時がきたらまた会おう。憎きゼウスよ」

アーシャルはそう言つと、後ろのリルを誘つように手を握つた。リ

ルはアーシャルの顔を途惑いがちに見つめる。

「リルつ！」

レインの切羽詰まった声で叫ぶよつこやかを呼び、手を伸ばした。リ

ルはレインを悲しげな瞳で見つめる。

「…………めん」

そつ言つやこなや、一人の姿はその場から搔き消えた。

冷たい風が辺りを包む。

レインは呆然と、先ほどまでリルが立っていた場所を見つめた。伸ばしていた手をゆっくりと力なくおろす。

俯いて、膝をついた。唇を無意識に噛みしめる。

「リル……っ！」

「レインレット……っ！？」

しばらくすると、焦ったような声が耳朶をうつた。力なく振り返ると、リゼルグ司教とガルドとリリアがいる。

「なにがあつたんだ！？」

リゼルグがレインの両肩を掴み、揺さぶる。レインは濁つた目でただリゼルグを見つめていた。

その頬を、リゼルグの隣にいたリリアが平手でうつた。乾いた音が響く。レインは瞠目し、リリアを見つめた。

「リルは、どこにいったの？」

リリアは冷めた目でレインを見つめ、重々しく口を開いた。ガルドはレインを心配げに見る。

「……わから、ない……」

レインは首をのろのろと横に振った。掠れた声しか出ない。

「アーシャルが、リルを……」

『連れて行つた』

そう言おうと思った。しかし、それはできない。

連れて行つたんじゃない。アーシャルは……

「助けたんだ……」

あの牢から。

リリアはしばらくレインを見つめた後、ため息を吐いた。

「…………」

もう用はないとでもいうよし、リリアは身を翻す。

「あ、おいーー！リリア……」

ガルドは驚き、リリアを追いかける。リゼルグは、レインの肩から手を離し、目を伏せた。

「…………」

沈黙が広がる。

レインは、顔を上げた。

「俺は、リルの傍にいないう�がいいのか…………？」

リゼルグはレインを一瞥した。風が頬をうつ。

「…………ああ」

レインはまた俯く。握っていた拳が震えているのを視界にとらえ、リゼルグはそこから目をそらした。

「いつたあ…………！」

一瞬視界が歪んだ。と思ったら今度は尻に痛みが走る。目を開けると、そこはあの異教徒の教会だった。

顔をあげると、そこには自分とまったく同じの顔をした像がある。

目を細めた。

「怪我はないか？」

隣で危なげなく着地していたアーシャルを見て、リルは睨んだ。

「あんたねえ…………いつたいどんな技つかったの？」

「瞬間移動だ。空間を曲げた。常識だろ？」

人間にとつては非常識だ。

リルはため息をはいた。

「ここはすぐ追手がくる。今日一日、休んだ後また移動するぞ」

「…わかったわ」

そう言うと、リルは勢いよく顔をあげた。目を見開く。アーシャルの胸倉を掴みあげた。

「あんた、さつきレインのこと『憎きゼウス』って言ったわよね！？どういうこと？」

アーシャルは目を丸くする。

リルの青の瞳はわずかに揺れていた。

「……お前の相棒……レインレットは、ゼウス神の『愛し子』だ」

リルの手から力が抜ける。

愛し子、と口だけ動かした。目を伏せる。

膝の力も抜け、リルは胸を押さえた。

リルの隣に腰をおろし、アーシャルは自身の上着を脱ぐ。

「ほら」

そして、リルの足に掛けた。リルは呆然と上着を見る。

そういえば、コートは牢においたままなんだつた

どうりで足が寒いはずだ。

「寒いか？」

こちらを気遣うアーシャルにリルは掠れた声で返した。

「大丈夫よ。ねえ」

一拍おいて、リルは訪ねる。アーシャルがこちらに視線をやるのがわかつた。

「過去を見ただけじゃあ、やつぱりまだわからないわ

く教えて。あんたはなんなの？」

リルは睨むようにアーシャルを見る。

アーシャルは、リルを一瞥して答えた。

「ゼウスに作られた存在だ。本来なら、ゼウス神に逆らえない。しかし、セルフィーナが……お前が、自身の血を俺に飲ませたゼウスよりお前のほうが力が強いからな。俺の主はお前だ」

詳し

「……なんで、セルフィーナに使えよつと思つたの？」

その問いに、アーシャルは驚いたよつてひからを向く。そして笑つた。

「なんでだろうな」

「いい加減な……」

「…………私は、どうなるの？」

それでも怪しいと、警戒しようとは思えない。リルは苦笑する。

「…………私は、どうなるの？」

囁くようにいつたつもりだったのに、教会には異様にその声は響いた。

アーシャルは顔から表情を消す。

「…………どういう意味だ？」

「リルディウス・ローズはどうなるの？」

囁みしめるよつて、リルは言つた。リルの青の瞳とアーシャルの紅の瞳が交叉する。

「…………リルディウス・ローズの魂は、セルフィーナの魂に押しつぶされる」

背中に氷塊が落ちたよつた感覚になつた。手を強く握りしめる。

「私は、いなくなるの？」

「違う。セルフィーナになるんだ」

「どう違つていつのつー？」

リルの叫びが木靈した。

「お前のその身体能力は、セルフィーナの力だ。まあ、お前そのものの力も入つてゐるが……、お前の身体は着々とセルフィーナのものになつていく」

無意識に、唇を囁みしめた。鉄の味が口に広がる。

「私の身体は、私のものよ！他の誰のものでもないわ！立ち上がり叫ぶリルの腕を、アーシャルは掴む。

「なら、なぜ俺の手をとつた？」

冷静な声に、リルは瞠目した。

「…………それは、……ゼウス神を倒せば、悪魔がいなくなるから……」

.....」

悪魔を造っているのはゼウス神だ。元を消せば消滅する。

「確かにそうだな。しかし、本当にそれだけか？」

一つ一つの言葉に身が震えた。

今、ここにいるのは本当に私の意志？

リルディウス・ローズの意志？

わからない。

膝の力が抜けた。リルはその場で崩れるよつにして膝をつく。胸に手をあて、握りしめた。

嘘だ

「わたし、は……！」

どこまで、私の意志？

レインの手を振り切つたのは、本当にリルディウス・ローズの決断？

「もう、時間はない」

アーシャルの淡々とした聲音が上から降つてくる。顔を上げることはできなかつた。

「ゼウス神も、教会も止まつてくれない。お前はもつ、逃げられないんだよ」

もう、後戻りはできない

「お前はセルフィーナなんだ。どう足搔いてもな」

月は、ただこちらに光を送るだけ。

誰も救つてはくれない。

夢を、見た。

それは残酷で、恐ろしいものだった。

空を切る自分の手を、レインはただ呆然と見つめる。一いちらを見つめる青は、自分には止められない決意を宿していた。

「 」

名前を、呼ぼうとした。

しかし、それは音にならなかつた。彼女はこちらに背を向ける。いつのまにか彼女の傍らに現れた青年の手を、躊躇なくとつた。

青年は笑う。紅い瞳がこちらに向けられた。

「お前じやあ、こいつは護れない」

その一言で、レインの身体は音をたてて硬直した。
瞠目して、レインは見ていくことしか出来なかつた。

嗚呼

どこかへ、彼女はいつてしまつ

勢いよく口を開けた。重々しづく上半身をおこし、レインは両手で口

元を覆う。

頭が痛い。

荒い呼吸を何度も繰り返し、レインはベットから降りた。

頭を掻きながら洗面所に向かい、冷水で顔を洗う。ようやく完全に覚醒した。

「 」

鏡から見る自分の顔は酷いものだつた。霸氣のない紫がこぢらを見ている。

「 はは はつ 」

自嘲の笑みを浮かべ、レインは数歩後ろに躊躇めぐ。顎を伝つて、零が落ちた。

お前じやあ、こいつは護れない

アーシヤルの言葉が未だに鼓膜に焼き付いている。

確かに、そうだ。

牢に閉じこめられる彼女を自分は助けてやれなかつた。あの異教徒の教会の女神を見た時から、自分の奥でなにかが渦巻いている。

女神を見た時、心臓が不自然にはねた。

今まで凍つてたんじやないかと思うくらい、血の流れを感じたのだ。

「くそ…… つ 」

壁に拳を打ち付ける。歯を強く食いしばつた。

彼女の手は自分を求めていない。

彼女の手を取れるのは自分じやない。

それがどうじよつもなくもどかしかつた。

鏡から目をそらし、レインは洗面所を出た。

少し濡れたため頬に髪が張り付く。それを手で払い、レインは浴室に戻つた。

寝間着からエクソシスト用の服に着替える。机の上に置いておいた十字架を首にかけ、レインは窓から空を見た。

クロス

その空は憎いほど綺麗な青だった。

「レイン」

名を呼ばれて、振り返る。

そこには気まずそうに顔をしかめたガルドがいた。

思わず苦笑が漏れる。

「おはよっ」

挨拶をすると、ガルドは瞪田した。

これでもかと瞳が見開かれる。

「……おはよっ」

しばらくして、それだけ言つと、ガルドは俯いてしまう。

「……昨日のことは気にしないで良い。リリアさんのこと、気にしないから」

むしろ、リリアの行動はレインにとって助けだった。

あのままリゼルグに問いかけられても、なにも答えられなかつたら、リリアの平手打ちでよつやく我に返つたのだ。

「……レイン……」

ガルドが眉をよせてじらじらを見つける。意を決したように口を開いた。

「お前……今日は任務ないそうだ」

「……そ、か……」

それもそうだらう。

レインはため息をはいて、血室の方向へと向きを変える。

「それじゃあ」

ガルドに背を向けて、レインは片手をあげる。

「……ああ」

小さくそつ返し、ガルドはレインと正反対へと歩を進めた。

教皇は持っていた紙を落とした。

手からすべり落ちた紙に田もくれず、教皇は瞠くらする。

唇が無意識に震え出した。

「…………なん…………だと…………！？」

教皇は思わず立ち上がった。報告書を持つてきたりゼルグは田を細める。

「…………どうしますか？」

リゼルグの問いに、教皇は裏返った声で叫んだ。

「リルディウス・ローズを捕まえろ！」

逃がさない、逃がさない。

「嗚呼…………、ようやく刻が来たのか…………」

暗闇で、青年は囁ささつ。

「セルフイーナ…………」

邊おしそつに名を呼ぶと、青年は瞳をあけた。

その瞳は、暗闇でなを幽うらしく燐りんめぐ、紫水晶を宿していた。

何度もその名を喚よまつ。

何度も何度も。

君が俺の手の中に還るまで。

音がした。

それは不愉快なほど大きいわけではなくて、ほんの少しの、小さな物音。

ゆっくりとリルは重い瞼を開けた。開けた瞬間に、光が目に飛び込んでくる。思わずもう一度目を瞑り、顔を背けた。

「……起きたのか……」

アーシャルが驚いて振り返る。その顔には自分が起こしたのか、と心配げな色を宿しているのがわかつた。リルは上半身を起こし、苦笑する。

「大丈夫よ。あんたのせいじゃないから。……今、何時頃?」「だいたい、9時頃だろう。だいぶ寝ていたぞ、お前」

アーシャルの言葉に、リルは瞠目する。

「大丈夫なの?」

その問いの意味することを正確に読み取り、アーシャルは頷いた。
「ああ、大丈夫だ。……大丈夫じやなくなるのは、これからだからな」

「そう……」

リルは俯き、身体にかけてあつたアーシャルの上着を握りしめた。

「まだ、教会の連中は公には動かない。俺たちには余裕がある」

「……大きく動けば、周りが不審に思うから?」

「そうだ。でも、油断はできない。昼飯食つたら、ここから離れたほうがいいな」

アーシャルの言葉が重々しく耳朵をうつ。

リルは一瞬青の瞳を揺らした。

わかつてた。わかつてゐつもりだつた。

でも、こうして現実を突きつけられると、どうしても辛い。唇をかんで、振り切るように立ち上がる。

「ねえ、アーシャル。朝ご飯は？」

小首を傾げて問うと、無言でなにかを投げられた。反射的に手でキヤツチすると、それは赤い果実。

「…………お前が寝ているうちに買ってきた。ありがたく思え

「随分と偉そうね」

思わず笑って、リルは林檎を一口齧る。口に甘い味がゆっくりと広がった。

10歳くらいの頃、兄と2人だけで出かけたことがある。

といつても、それは兄が強制的に自分の腕をひっぱって外に連れ出したのだ。

義母と父と兄、3人で行つたことはあつたが、兄だけといつたことなどなかつた。

初めは困惑しかなかつたが、次第に状況を理解して、自分の顔から血の気が引くのがわかる。

それに気づいた兄が、驚いて引っ張つていた手を離した。

「大丈夫かっ！？リル！」

あんたのせいだよ、とはこの時さすがに言えなかつた。

「リル？大丈夫か……？」

顔を覗き込み、心配げに問い合わせてくる兄に、リルは顔を顰める。

「大丈夫……だけど、いいの？義母様にも、父様にも言わないで……」

「だーいじょうぶ！大丈夫！」

リルの問いに、リズは笑つて答えた。その声は明るく、自信に満ちている。

「俺もう子供つて歳じゃないし！」

「4歳は子供じゃないのか。

リルは訝しげな瞳をリズに向けた。

「さあ！そんなこと、気にして行け、リル！」

またリルの手をつかんで、リズは突き進んでいく。リルは先ほど同様、たいした抵抗をせず、リズに連れて行かれるままになつた。

人が多い中、リズは器用に間をすりぬけて進んでいた。リルも同じように進んでいく。

ふと、リズがとまつた。リルは首を傾げる。

「兄さん？」

昔みたいに、そう呼べないことはない。しかし、やはつどいかぎこちない響きがあつた。

「ちょっとまつてて！」

そう言うやいなや、リズは走つていつてしまつ。呆然とそれを見届けていたリルは周りを見回した。

通行の邪魔にならないよう、端のほうへよつてしゃがむ。しばらくすると、リズが走つてくるのが見えた。立ち上がり、リルはスカートの裾を手ではらう。

「遅い」

開口一番にそういうて、リルはリズを睨む。リズは笑いながら、「ごめん」といった。その手には、茶色い紙袋が握られていた。

「なに？ それ…」

首を傾げて問うと、リズははい、とその紙袋をリルに渡す。以外に重い紙袋を落としそうになり、慌ててしつかりと持ち直す。中を見ると、赤い果実、林檎が2個入つていた。

「林檎…？」

「うん。買ってきたんだ」

食べて、とリズは微笑む。困惑の様子を隠せないリルは、顔をあげ

リズを見た。

「…………」

恐る恐る林檎をとる。

ひんやりとした冷たさが片手を支配した。一口、林檎を嚥る。

「どう?」

興味津々に聞いてくるリズを見て、リルは頬を紅潮させて言った。

「おいしい……」

吐息のような言葉に、リズは満足げに笑う。

「よかつた!」

林檎をもう一口嚥り、リルは微笑を浮かべた。

口に広がる味に、つい昔の思い出が甦ったのだ。

ゆっくりと味わって林檎を食べ終え、リルは女神の像を見上げる。幸せそうな微笑を浮かべた女神の セルフィーナの像を、リルは凝視する。

見れば見るほど自分と同じで、つい目を逸らした。

「食い終わったのか?」

声のしたほうを振り返ると、アーシャルがいた。

手には紙袋を2つ抱えている。ふと、脳裏に兄の姿が過ぎた。

「なに、それ……?」

「これか? 服だ」

片方の紙袋を軽く持ち上げ、アーシャルはリルに投げてよこす。しっかりと受け取り、リルは腰を下ろして中を見た。確かにそこには服が何着か入っていた。

淡い、あまり目立たない女用の服に、フードつきのマート。

ど」にでもあるよつな、一般的な庶民の服だ。

「これに今すぐ着替える。目立たないほうが良いからな」

そう言つと、アーシャルは踵をかえし、広場をでた。氣を遣つてい
るのだねつ。

リルは紙袋を床におき、自分の着ていた服に手をかけた。

着替え終え、自分の姿を見下ろす。

膝より少し上まであるスカートに、靴はしままでのブーツ。上から
着てあるコートは黒で、膝より下くらいまであるものだ。

動きやすいし、着心地も良い。

これなら万が一の時、ちゃんと戦えるな、とリルは安堵の息をはいた。

といつても武器は対魔専用銃しかない。教会の追手 人間相
手には全然効かないだろつ。

銃を持ち、遠くにあつた柱に向ける。

銃声が響いた。

柱が音をたてて傷つく。物には直接被害がでる。

銃声を聞き、アーシャルがこちらに来た。珍しく焦った顔をしてい
る。

「…………なにをしてるんだ？」

「…………別に、ちょっとした試し撃ちを……。それにしても、アーシ
ャル、似合つてるわね」

白に近い水色の服と、紺色のズボン。黒のブーツに同じく膝より下
まであるフードつきのコートに身を包んだアーシャルを、リルは見
つめた。

白髪紅眼は、あまりアルティラルド王国には見かけない色彩のため、
なるべく隠しといたほうが良い。

「はあ……。前の服は燃やすから渡せ」

アーシャルは大げさにため息をはき、片手を差し延べた。その手に
リルは先ほどまで着ていた、エクソシストの制服を渡す。
突如、アーシャルの手から炎が燃え上がった。
服は一瞬にして灰になり、流されていく。
それを見届け、リルは瞳を閉じた。

偽りの神話に終わりの詩を。^{うた}

違和感が、あつた。

レインはふと、銃をうつ手を止める。

リルがいなくなつて、3日たつた。今日から普通に任務に入るこ
とになつたレインは、ある街の悪魔退治をしている。

うつ手を止めたのはほんの一瞬で、すぐまた引き金に力を入れる。
「ギャアアアツツツ！」

悪魔の断末魔が響く。口から赤黒い液体がこぼれ落ちた。しかし、
悪魔は倒れない。

「？」

怪訝な顔をして、レインは悪魔を見る。が、すぐにまた引き金を
引いた。

悪魔は口端を吊り上げて、嗤つた。

「嗚呼…………あなたは…………」

嗄しゃがれた声に、レインの肩がびくつく。

「は……はははは……！」

悪魔の高笑いが夜の街に響いた。レインは一步後ろに下がる。
なんなんだ……？この悪魔……

もう三発以上うつた。効いていたはずだ。なのに。
なんでまだ消えない…………！？

最近、悪魔の様子が変だつた。ルエルでのエリザベスに取り憑い
た悪魔を初め、ほとんどがそうだ。まだ助かる段階なのに助からな
かつたり、契約してだいぶ日がたつてのにまだ意識があつたり。

「くそ…………つ」

そう吐き捨て、レインは銃先を悪魔に再び向けた。

アーシャルとリルは、人通りの少ない道を歩いていた。

フードを深く被っているので、お互い顔が見えない。夜の闇も加わって、姿も良く見えなかつた。

リルは夜目がきくほうだが、アーシャルはどうなのだろう。前を歩く青年を一瞥したが、結局聞かなかつた。

「……止まれ」

小さく呟かれた声に、リルの足が止まる。

「どうしたの？」

同じく小声で問うと、紅い目がこぢらを見た。

「悪魔だ」

アーシャルの見つめているまつを見ると、そこには男がいた。あまり上質とはいえない服に身を包み、空を見上げている。その瞳は見開かれていて、口は弧を描いていた。男の服には赤黒いものがこびりついており、近くには女だと思われる肉の塊が力なく倒れている。暗闇の中でもわかる白い肌には紅いものが浸食していた。足は変な方向に曲がつたおり、乱れた薄い茶色の髪は地面に広がっている。その地面には紅が斑を描いていた。顔はこちらから見えない。

男の手をよく見ると、紅い塊が握られていた。そこからまた新しい液体が伝い落ちて、地面に円を描く。

「……ここにいる」

低くそう言つと、アーシャルはリルを壁の影に隠れさせ、自身は悪魔の前まで進む。

悪魔がアーシャルに気づいた。

「ああ……貴様は……」

悪魔の口が開く。禍々しい尖つた牙がのぞいた。

「裏切り者お……！」

叫び突進してくる悪魔をよけ、
アーシャルは首を掴む。
なにかが折れる鈍い音がした。
目を見開き、悪魔の動きがとまつ

が。 た。

身体をくの字にして、悪魔が嗤う。アーシャルは驚いた様子を見せず、ただ悪魔を見ていた。

「馬鹿があ..... つつ！」

尖った爪がアーシャルの首を貫きそうになる。その瞬間、銃声が響いた。

「……………リルディウス…………」

アーシャルは、驚いたように目を見開いた。

悪魔を睨み、リルはアーシャルを見る。

「ねえ、聞いていい?」

悪魔は完全に死んでる
それを見届け確認した後
リバが重々しく口を開いた。

最近、悪魔の様子が変なのよ。……なにか、知つてる？」

リルはアーシャルを一瞥する。アーシャルはリルを数分見ていたが、正面に視線を変えた。

「……ゼウスが、セルフィーナを捕まえようと動き出したからだろ

アーシャルの紅の瞳が細められる。

「たぶん今頃……、『愛しお』のほうにも接触してゐるだろ?」

「これで、終わり！」

最後の1人の悪魔を撃ち、灰になつたのを確認してレインは安堵の息を吐いた。

服についた埃を払い、銃を片付ける。

「…………つー?」

突如、激痛が全身を迸つた。

レインは膝をつき、両手で頭を抱える。顔を歪めて、小さく呻き声を漏らした。

「ぐ…………つあ…………つつ」

目を見開き、喘ぐ。しかし痛みは全然収まらない。

苦しいか?

その時、頭に自分と良く似た まつたく同じの声音が響いた。

苦しいだろう、辛いだろう。我が愛し子よ

低い笑声が響く。

レインは歯を食いしばった。片手でコートを強く握る。

我が名はゼウス。貴様らが崇める主神だ

気がつくと、暗闇の中一人で立っていた。

さつきまでの激痛が嘘のようになくなつていて、瞠目する。

いつの間にか、目の前に自分と瓜二つの男が立つていた。

唯一違つのは、髪の長さくらいだ。目の前に立つてゐる男は胸くらこままである漆黒の髪を、首元あたりで括つていた。

男が喘う。

「ようやく会えたな、愛し子。さあ、我にその身体を委ねろ」「

そう言って片手を伸ばしてくる男 ゼウスを、レインは睨んだ。

「主神ゼウス様、俺は、あなたに身体を貸すことができん」

しつかりとした声音で、レインは拒否を示す。ゼウスが瞠目した。

「俺には、やらなきやいけないことがあるのです」

リルを取り戻したい、とかそういうのじゃない。

ただ、会つて、話がしたい。

切実にそう思つたのだ。

ゼウスはゆっくりと手を下ろした。そして、なぜかおかしそうに笑う。

片手で目元を覆い、ゼウスは笑つた。さも楽しげに。しかし、レインには狂つてゐるようにならへなかつた。数歩後ずさる。「はははっ……！初めてだ……我に逆らつた人間は！ そうか、……はははっ！」

散々笑っていたセウスたが、突然笑うのをやめる。辺りを静寂が包んだ。

でもなあ、鐵つ子……」

「低い低い声が耳朵をハニ

所詮お前は俺から逃げれないんだよ。頭をあざ二ダワクの童二は、狂氣が頭

口が弧を描き、ゼウスは人差し指をレインに向ける。

レインの肩がびくつく。

その反応に、ゼウスはまた嗤つた。

いつまで殴打するかなあ？…………お前も、あいつも」

あいひとに誰た

そり聞おふと思ひたがてきなかつた
思ひ立つゝうこ聞けらるべ

卷之三

「なんだったんだ？」

レインは立ち上がり、夜空を見上げた。

さあ、**愉**しい**愉**しい**遊**戯**を**しよううか。
ゲーム

悪魔の序曲はくまのじょくも、偽りの神話おとぎばなしももう終わったんだから。

水面に波紋が広がった。

とても綺麗な湖だな、と思つた。

水面に映る自分は、純白のドレスを着ていた。といつても貴族が着るような豪華なものじゃなくて、質素なワンピースだ。

金の髪が風に遊ばれた。

膝をつき、水面に手を伸ばす。その水に手が触れる瞬間、後ろに気配がした。

振り返ると、そこには自分がいた。

「…………はじめまして。リルディウス・ローズさん」

声まで同じだ。

後ろにいた自分は花のように微笑む。

「…………あなたが、セルフィーナ？」

問い合わせなくて、確認だつた。

セルフィーナは目を細めて笑つた。

「ええ、そう。私の名はセルフィーナよ」

そう言いながらセルフィーナはリルの隣に膝をつく。

同じ金の髪が、地面を掠めた。

「…………怒つてる？」

鈴の鳴つたような声が、耳朶をうつた。セルフィーナのほうを見ると、微笑んでいる。しかしその瞳はなぜか悲しみを帯びていて、うに見えた。

「…………怒つてるわ」

一拍のうちにさう答える。隣でセルフィーナが笑つた。

「正直ね」

「それが取り柄なの」

変な感覚だ。

自分とまったく同じ姿の別人と話している。

「私、ね……」

セルフィーナは手を伸ばし、水面にそれを浸した。そこから波紋が広がる。湖は見るからに冷たそうなのに、寒くないのか、トリルは少し心配になった。

彼女はそんなリルの心中を察したのか、微笑を浮かべる。

「ゼウスを恨んだことがない、なんてことなかつた」

まるで吐き捨てるようになこう言つた。肘のところまで、セルフィーナは水に浸かせる。長い金がはらりと落ちて、音をたてて水とぶつかった。

「心のどこかで、恨んでいたのね……。それに気づかないふりをした。愛しているのは本当。狂おしいほど今でもゼウスが好きよ」

セルフィーナは水面のような静けさをもつた瞳をリルに向ける。

「でも、あの子は決してしてはいけない罪を犯した。…………だから、

せめて私の手で、あの子を……」

ゆつくりと、湖から手を離した。白い指から水が伝い落ちる。

「ごめんなさいね…………。あなたを巻き込んで」

リルは瞠目する。なにか言おうとしたが、言葉が喉で絡まつてうまく言えない。

「私が完全に覚醒したら、あなたは消えるわ。あなたの肉体は、私のものになる」

リルの頬に、セルフィーナの手が触れた。セルフィーナの手は驚くほど冷たかった。

「あなたには、大切な人がいるのね」

セルフィーナの手が、リルの頬を撫でる。愛おしむように、壊れ物を扱うように。

「…………本当に、巻き込んでごめんなさいね」

セルフィーナの瞳から、一筋の涙がこぼれ落ちた。リルは呆然とセルフィーナを見つめる。

「ああ…………アーシャルが呼んでるわ。起きなさい」

セルフィーナはふと顔をあげ、微笑を浮かべた。

そして、セルフィーナの身体が少しずつ消えていく。完全に消えた時、リルの意識は遠くなつた。

「 さあ、起きる。リルティウス」

頬を軽く叩かれ、リルは眉間にしわを寄せた。

「 なにすんのよー……」

半分寝ぼけながらの声なので、呂律がうまくまわつていない。

「 はあ……とりあえず、起きる。今日この街を出るといつただろうつ

が

二人は今、王都のはずれの街の宿屋にいた。リルはベットからおりて、大きくのびをする。

「 ふああ……。もうそんな時間な……」

窓を見ると、もう夕方に近い。リルはコートをすばやく着た。アーシャルは一足先に部屋を出ている。

人目につかないよう、二人は街から出た。

ふと、リルが空を見上げる。血のようになに紅い夕焼けが、こちらを見ていた。

「」

唇を強く噛みしめ、リルは視線を前に移す。

先ほどまで見ていた夢が、脳裏を過ぎた。

本当に、巻き込んでごめんなさいね

セルフィーナの謝罪が、今も耳にこびりついて離れない。

「 ねえ、アーシャル」

「 なんだ?」

アーシャルは前を向いたまま、リルに続きを促した。

リルは一瞬考えるそぶりを見せたが、顔を上げた。

「さつき、セルフィーナに会つたわ」

その表現は適切じゃないのかもしれない。

自分自身が、セルフィーナなのだから。

アーシャルは瞠目したが、すぐに紅い瞳をふせた。

「…………そう、か…………」

そういうだけで、アーシャルはなにも言わなかつた。

「これから、どうするの？」

リルは、草木をよけながら、アーシャルに問う。

アーシャルはリルを一瞥し、すぐ視線をはずした。

「この国を出る」

「…………」

思わず息を止めるリルを気にせずアーシャルは淡々と続けた。

「お前の安全のためだ。今完全に覚醒してない状態でゼウスに会つのはまずい」

アーシャルの言葉に、リルは顔を顰める。

「ゼウスはこれから、お前を捕まえるために悪魔をこじらせてよーす。アルディラルドはゼウスの力が一番強い場所だ。一刻も早くここから出た方が良いな」

「…………そうね」

呴いて、リルは前を向いた。

「なら、早く出ましょう」

手を握りしめて、リルはそう言い切る。

アーシャルは無言で数秒リルを見ていたが、そうだな、と小さく

返し前を向いて歩き出した。

「ゼウス神はまだ、遊びを楽しんでいる段階だ」

歩きながらアーシャルは語る。

「もうじやなかつたら俺もお前も今頃捕まつてゐる。あと早くて2日でこの国を出るや」

それはリルにとつてはとんでもないことだ。

「あ！？馬車なしで！？」

「そうだ。出来るだけ遠くいくぞ。明後日こいこをたひ、船でサル

ナルス国に行く

「…………わかつたわ」

そう答へ、リルは空を睨むように見上げた。

月の光が嫌いだった。

レインは夜空を見上げる。

窓ごしで、月が見えた。雲ひとつかかっていない月は、太陽のように激しく自己主張をせず、優しく輝いている。

それでもレインは、月の光が嫌いだった。

暗闇の中、すべてを照らすわけでもなく、ただ微かに照らす月光。理由なんてわからない。ただ小さい頃から月光が、厭、月が嫌いだった。

「……満月」

満月だ。

ため息をはいた。前髪をかきあげ、ベットに倒れ込む。なぜか、いつまで立つても眠気が襲つてこなかった。

しかたなく起きあがり、また夜空を見る。

夜空には満月がただこちらを照らし続けているだけだった。

「……っ……」

頭痛が進る。

その場に倒れ、頭を抱えた。

「……ぐつ……ああ……っ」

口から苦痛の呻き声が漏れる。息が荒い。

頭が割れるんじゃないかと思つくらい痛かった。

そのままレインの意識は途絶えた。

夜だった。

ゼウスとセルフィーナは神殿を抜け出し、湖に来ていた。芝生に腰を下ろし、2柱は夜空を見上げる。

「綺麗ね」

セルフィーナが嬉しそうに言った。ゼウスはセルフィーナを数秒見つめ、すぐに視線を外して答える。

「……そうだね」

冷たい風が身体をうつた。さすがに夜中に外に出るのはきつかつたかもしれない。

「セフィー……寒くない？」

姉の身を案じ、そう聞くとセルフィーナは笑った。

「大丈夫よ！ゼウスこそ、大丈夫？」

小首を傾げて心配げに問う姉に、ゼウスは微笑を返した。

「大丈夫。……ねえ、セフィー」

「なに？」

少し顔を俯かせ、ゼウスはセルフィーナを見つめた。

「セフィーは、月が好き？」

その質問に、セルフィーナは目を丸くする。しかし、微笑んだ。

「好きよ。だって、夜の闇を照らしてくれるもの」

とても優しい光で、夜を照らす美しい月。

「ゼウスは、嫌いなの？」

セルフィーナは首を傾げる。それにあわせて金の髪が揺れた。

「……嫌いだよ」

顔を深く俯かせ、ゼウスは掠れた声で呟いた。

セルフィーナは瞬きをする。

「なんで？」

「……月は、太陽の光のおかげで光ってる。なにかに頼らないと

いけないのが、嫌いだ」

眉をよせそう言つゼウスに、セルフィーナはそつかと空を見た。

細い腕を、月に向かって伸ばす。

「確かに、そうだね」

「う…………」

呻き声をあげて、レインは重い瞼を開けようとした。しかし、それは適わない。眠気に負けて、レインはそのまま意識を手放した。

アーシャルとリルは、森に流れている川の近くで休んでいた。暗闇の中無闇に歩くのは危険だと判断したからだ。

「あ、満月」

ふと、リルが空を見上げる。そこには雲ひとつかかっていない満月があつた。思わず微笑む。

「ねえ、アーシャル。私ね、月が好きなの」
その言葉に、アーシャルは目を見開いた。
脳裏に浮かぶのは、いつかの少女。

『私ね、月が好きなの』

そう言つて笑つたのは、目の前にいる少女と瓜二つの女神。
「理由はね、わからない。…………でも、好き」
小さい頃からずっと。特に満月が好きだった。欠けることなく輝く
その姿が。

「そう、か…………」

初めは瞠目していたが、アーシャルは微笑んだ。
それを見て、リルは目を丸くする。

また、空を見た。

変わりのない満月がこちらを見ていた。

リルは腕を月に向かってのばし、優しく微笑んだ。

愛してた。愛していた。だけど

。

夢を見た。

辛く悲しい夢。だけどどこか懐かしい、幸せだった夢を。田をこすり、リルは上半身だけ起きあがる。そこで初めて自分が泣いていることに気づいた。

頬を伝い落ちた涙は布団代わりの「コード」を濡らす。

「…………夢…………」

呟いて、田をもう一度こにする。なぜか涙がまだこぼれ落ちていった。

内容を覚えていないのに、なぜか無償に胸が痛い。

「どうした…………？」

隣で仮寝をしていたアーシャルが起きた。リルは慌てて両手を振る。

「な、なんでもない！まだ寝ていいわよ、アーシャルっ」「慌てて顔を背ける。泣いている顔を見せたくなかつた。

「…………本当にどうしたんだ？」

「大丈夫だつて！ほら、寝た寝たつ！」

どうにか涙を抑えさえ、明るく振る舞うリルに、アーシャルは怪訝な顔をしつつもつ一度瞼を閉じる。それを見届け、リルは安堵の息をはいた。

胸に手をあて、俯ぐ。それに合わせて金の髪が流れた。

「…………」

瞼を閉じ、深呼吸してリルはまた横になった。

「もうすぐで、船だ」

アーシャルの言葉にリルは頷き、前を見た。
しばらく歩くと、海が見えてきた。日光が反射して輝く海に、リルは感嘆の息を漏らす。

アーシャルはまったく動じず淡々とした様子で近くにいる男に声をかけた。

「この船はどこ行きだ？」

アーシャルの口調に男は一瞬眉をよせたがすぐに口を開いた。

「サルナルスだよ」

ぶつきらぼうにそう答え、男は早足でその場を去ってしまう。リルはアーシャルを睨んだ。

「あんたねえ……、訪ね方つてもんがあるでしょうが！初対面でこんな態度は駄目でしょう！？」

「人間の常識なんて知るか」

対するアーシャルは淡々と返す。リルは呆れて声も出なかつた。

「……、なにを気にしているか知らんが、あの男とはもう会うことなんてないだろ？どんな態度だろ？と関係ない」

アーシャルは呆れたようにため息を吐く。吐きたいのはこっちだ、リルはアーシャルをまた睨んだ。

「ほり、さつさと船に乗るぞ」

アーシャルはそう言うと背をむけ、先にいってしまう。リルはその背中を慌てて追いかけた。

我が愛し子よ

自分とそつくりの声が頭に響いた。

レインはふと顔を上げる。なにか声が聞こえた気がしたが、すぐに気のせいだ、と思い直すと前を見た。

昼。任務帰りで疲れた身体を引きずつてようやく教会に着いたのが先ほどのことだった。

「はあ……」

シャワーを浴びて、レインは人心地つく。なぜか身体が重かつた。愛し子よ

ゼウスの声が未だ耳に残つてゐる。信じたくなかった。
自分がゼウス神の愛し子だなんて、どうしても信じたくなかったのだ。だって、彼女は、リルはセルフィーナの生まれ変わりなのだから。

セルフィーナはゼウスの敵。ゼウスを殺そうとした罪に穢れた女神なのだ。

厭だ、と顔を横に振る。

そんなの信じたくない。

リルは罪に穢れてなんかない。

『穢れているよ』

ふいに、頭に声が響いた。

驚きに目を見開くレインに、嘲笑が響く。

『あいつは穢れている。俺が穢したんだからな』

そう言つて、また嘲笑するのは誰だ？

レインは口を開いた。喉が嗄れていて声が掠れていた。

「ゼ、ウス……神……？」

『そうだ。我が愛し子よ』

前が真っ暗になつた。目の前に、ゼウス神が起立している。

『どうした？愛し子。ずいぶんと生意氣な顔をしているぞ』

顔には笑みを浮かべながら、しかし瞳は全然笑っていない。

『……、穢した、とはどういう意味ですか？』

レインの感情を抑えた声に、ゼウスは笑みを深くする。

『その問いには俺は答えない。まあ、安心しろ、近い未来にお前は厭というほど知ることだからな』

ゼウスの答えに、レインは眉を寄せる。どういう意味なのか図りかねているのだろう。数分したのちレインは、意を決したように顔をあげた。

「セルフィーナは、あなたが『穴』に落としたはずだ。なぜ、生まれ変わりとなつて地上にいるんですか？」

ずっと、疑問に思つていたこと。

神話には『セルフィーナが穴に落とされ、悪魔をつくり、その後どうなつたかは記されていない』

しかし、穴から出たとも記されていないのだ。

『……』

ゼウスの纏う空氣が変わつた。

一気に肌をかくよくな、厳しい空氣にかわつたのを、レインは瞠目する。

『下らない質問だな……』

ゼウスはその咳きを最後に、闇に溶け消えた。

サルナルスについた時は、丁度昼頃だつた。

「んー……ついたあ……」

伸びをひとつして、リルは笑つ。隣でアーシャルがフードを被りつつ、リルに問うた。

「昼飯を先に食つか、宿屋を探すか、どっちがいい？」

淡々とそういう言つアーシャルの言葉に、リルは迷つようになつて、一つ唸つた。

「そうねえ……。じゃあ、先に宿屋を探しましょ」

「わかった。いくぞ」

頷き、アーシャルは前に進む。リルもそれにならい、サルナルスへと一步踏み出した。

それから数十分、ようやく良いく宿屋にありつけ、リルはベットに倒れ込んだ。久しぶりのベットなので、嬉しさがこみ上げてくる。

「柔らかい……」

枕を抱きしめ、リルは幸せそうに眠く。アーシャルはその様子を呆れた目で見ていた。

「……昼飯を食いに行くぞ。はやく起きる」

苦笑してアーシャルは言つた。リルは名残惜しげにベットから起きあがつた。

宿屋から出て、2人はとりあえず市場を歩いていた。リルふと足をとめ、ある店を見つめる。

「アーシャル、あれおいしそう！」

リルは指をさして言った。その指先の示すものへとアーシャルが目を走らせる。それはパンだった。

「あれにするか？」

「ええ。あれが食べたい」

アーシャルの問いに、リルは深く頷く。幼い子供を相手しているような気がして、アーシャルは思わず笑みをもらした。

「じいさん、これ2つくれ」

パンを売っているお爺さんアーシャルは声を掛ける。お爺さんはにこりと優しい微笑をうかべ、手際よくパンを紙袋に包む。

「はいよ。合計銅貨4粒だ」

パンを受け取り、アーシャルはその細く皺の刻まれた手に4粒落とした。金は4国共通だから困らない。

「ほら」

アーシャルは焼きたてのパンをリルの手にのせた。

リルは嬉しそうにそれを口に運ぶ。一口たべ、顔を上げた。

「おいしい！」

満足そうにそう言うリルの頭を、アーシャルは無意識に撫でた。リルは目を丸くし、瞬きをする。

しかしアーシャルの手を払いのけるようなことはしない。力はだんだんと強くなつてくる。さすがにそれには焦り、リルは慌てて言つた。

「ちょ……アーシャル！髪が、髪つ！」

リルの声によく正気に戻つたのか、アーシャルは手をどかした。リルはアーシャルを睨む。

「ぐしゃぐしゃになつたじやない！」

「すまん、でもすぐ戻るだろ。大丈夫だ」

反省した様子もなくそう言つアーシャルに、リルは唸る。

「……確かにそうだけど……」

次第にこんなことで怒っているのが馬鹿らしくなり、リルはため

息をはきパンを食べるのを再開した。

ふんわりとした生地の中に、ほんのり甘いクリームの入ったパンは、とてもおいしかった。

「レイン様」

見慣れた食堂に、一人端のほうで黙々と食事をとっていたレインは、呼ばれたきがして顔を上げる。

前には、メリセリタが自分の食事をもつて立っていた。エメラルドの瞳は嬉しさで輝いていた。

「あの……、前、いいですか？」

いつもリルに話しかけている敵意丸出しの声でなく、猫なで声だ。「別にいいですよ。どうぞ」

断る理由なんてないため、レインはすぐ了承した。するとメリセリタの頬が紅潮する。

「ありがとうございますわ！」

満面の笑みを浮かべ、メリセリタはレインの前に座る。そして、食事に手をつけず、レインを見ていた。

レインは首を傾げる。

「どうしたんですか？」

「えー！い……いいえ！なんでもないですわ！」

慌てて両手を振るメリセリタの顔は真っ赤だ。レインは怪訝な顔をしたが、食事を再開した。

「ねえ、レイン様、リルディウス・ローズが捕まつた、て本当なのですか？」

メリセリタの言葉に、レインの手は止まる。それに気づかず、メリセリタは言葉を続ける。

「しかも、逃げ出したんですね。まったく、馬鹿なことをしましたわね、あの人も」

「なにをしたか知りませんけど、そのまま捕まつてほうがいいものを」

その声には明かに侮蔑の色を宿していた。思わずレインはスプレーを持つていて手に力を込める。

「ねえ、レイン様。あなたもそう思いませんこと？ そうですわよね。だっていつもあなたは迷惑していたでしょう？ 毎回毎回、なにか壊して。清々したでしよう？ リルディウス・ローズがいなくなつて」

その一言に、ついにレインは我慢できなくなつた。

乾いた音が食堂に響く。

メリセリタは呆然と自分の片頬に手をあてた。立ち上がり、こちらを怒り狂つた瞳で睨む人を見つめる。信じられなかつた。

「レイン、様……？」

彼が自分を平手打ちした、という事実が頭に染み込む。食堂にいた人全員の視線が2人に集まつた。

「……これ以上、リルを侮辱するのなら、たとえ女性であつても容赦なんてしません。言葉は選んで発言してくださいね、アシユルさん」

低い声でそう言つてもう一度メリセリタを睨むと、レインは乱暴に食堂を出た。

昼飯を食べて、リルとアーシャルは宿屋に帰った。腹が満たされて上機嫌のリルは、宿屋に入り一階の広場で、適当に椅子に座る。アーシャルはその真正面の椅子に腰を下ろし、カウンターに声をかけた。

「……林檎ジュースと、酒をくれ」

「はいよ」

カウンターから顔を出した女性にアーシャルは素っ気なく言つ。だいたい30代後半くらいの女性は苦笑して奥に戻つた。

「ちょっと、私もう16よ？ 酒くらい飲めるわ」

先ほどまでの上機嫌はどこへ言つたのか、不満げな顔をして抗議するリルを、アーシャルは一瞥し、鼻で笑つた。

「子供だろ」

その一言に、リルは余計不機嫌になる。

アーシャルは口を手で押さえ、笑いをかみ殺しているがその努力は無駄に終わつた。結局笑いは収まらない。

「はい、林檎ジュースと酒だよ」

先ほどの女性は丁寧にリルの前にジュース、アーシャルの前に酒をおく。リルは林檎ジュースを一瞥し、手を伸ばした。一口飲む。

「……おいしい」

一言呴いて、リルはジュースを一気飲みした。

「良い飲みっぷりだなあ、嬢ちゃん」

近くで数人で酒を飲んでいた男が笑いながらリルに言つ。リルはコップをテーブル置いた。

「嬢ちゃんつて歳じゃないわよ」

拗ねたようにそっぽを向くリルに、男は大きく笑う。

「はつはつは！ そりやあごめんな！」

そう言つてリルの背を乱暴に数回叩く。軽く叩いているのでそこ

まで痛くない。

薄い茶色にオールバックの髪型。ほどよく筋肉のついたがたいの良い身体に、日に焼けた肌。だいたい20代ぐらいの男は片手に酒を持つている。頬は少し紅潮しているため、酔っているのだろう。

「名前はなんていうんだい？」

男はいつのまにか椅子をこちらに持ってきて、腰を下ろしている。男の仲間までこちらに寄ってきた。

「……人に名前を聞くときは、まず自分から名乗りなさいよ」

リルの言葉に男は一瞬目を丸くする。しかしすぐ笑つた。

「確かにそうだな！俺の名前はコウガだ！よろしく」

「……私はリルディウスよ」

名字も名乗ろうかと思ったが、やめた。男、コウガも名前だけだ。で、こっちが私の従兄のアーシャル」

リルはさつきから無言で酒を飲んでいるアーシャルを指し言った。アーシャルの非難の籠もつた視線を向けられたが、気にしない。「そうかそうか。にしても嬢ちゃん長げえ名前だなあ。貴族様かい？」

『貴族』といつとこに皮肉が籠もつていた。それに気づき、リルは眉を寄せる。

「そんなわけないでしょ？私のこの格好が貴族の着ている、妙に派手でお世辞にも実用的だと言えないものに見える？」

リルはそう言つて肩をすくめてみせる。すると、「ウガと仲間が吹き出した。

「確かに、そうだな。でもこの国のもんじゃねえだろ。二人とも」

「……そうよ。アルディラルドからきたの」

嘘を言おうと思つた。白を切ることもできたが、それはしない。下手にそれをすると、逆に怪しまれる。

「そうなのか……。大国からどうしてこんな国にきたんだ？」

当然の疑問を投げかけるコウガに、リルは笑つ。

「いろいろあつてね。アーシャルと、2人で旅することになったの

よ

「そりなのか……。まだ二十もいってねえのに大変だなあ。アルティラルドと違つて、この国は治安が悪いところもあるしなあ。氣をつけるよ」

そう言つて、コウガは声を潜めた。

「あと、最近、悪魔のほうも多くなつてきたしなあ」

「コウガの言葉に、リルは顔を上げた。瞠目するコウガに構わず、リルは叫ぶように問う。

「それ、どういうこと!？」

「え? は? どういうこと? て…… そのまんまの意味だぜ? 最近、悪

魔関係の事件が前よりも多くなつてゐる、てだけ……」

「どうして、お前がそんなことを知つてゐる?」

今まで黙つて酒を呷つていたアーシャルが、徐に口を開いた。

「一般人には悪魔関係の仕事の数なんて知らされないだろ? なんで知つている?」

淡々と言つアーシャルの言葉に、コウガは数回瞬きをした後、口端を吊り上げた。

「俺はこれでも警備兵なんだよ」

そう言つと、懐に入つていた身分証を出す。リルは目を丸くした。アーシャルは納得したのか、飲むのを再開する。

「 と、いうことで氣をつけろよ、リルティウスちゃん、アーチャル。二人にゼウス神の加護があ在らんことを!」

優しげに笑い、コウガは仲間のところへ戻る。リルはそれを呆然と見送ると、ため息をはいた。

ゼウス神のご加護、ねえ……

アーシャルは嘲笑を浮かべた。リルは窓を見つめ、吐き捨てるようになごむ。

「なすことを探るわ」

暗闇の中、鈍い音が響いた。

煉瓦造りの壁に、紅いものが飛び散った。

鉄鎧の臭いが広がる。荒い呼吸を何度も繰り返し、男は空を仰いだ。

紅く濡れた両手を前に翳す。自然と笑みが広がった。

嗚呼、殺してやつた

彼の足下には、無造作に丸いものが転がっていた。それを男は軽く蹴る。重々しく、丸いものは転がつた。蹴る力が弱かつたので、少し移動しただけだ。

丸いものが月光で照らされる。

白目をむき、口から赤黒いものを流す、男の首だった。壁に力なくよしかかっているのは、胴だ。

「くつはははははつ」

男の囁い声が、闇夜に響いた。

「ねえ、また出たらしいわよ」

「ええ！？また？」

「うん。……本当怖いわあ……。犯人、まだ捕まつてないんでしょう？」

？」

「まったく……。警備兵は一体なにしてるんだか」

朝、3、4人で輪を作り噂していた婦人の話に、リルは立ち止まつた。そして、その婦人達の方へ寄る。

「なんの話ですか？」

婦人達は突然現れたリルに驚きつつも、丁寧に教えてくれた。

「あら？ あなた違う国の人？ それなら知らないのも仕方ないわね」

「ここ最近、無差別殺人が起こってるのよ」

それから順番に婦人達は自分の知っている情報を喋つた。婦人達の説明を聞き、リルは微笑んだ。

「そうですか……。それは物騒ですね。ありがとうございます」「物騒よねえ……。でも、それをなくしたらこの国はとても良い国よ」

婦人の一人がそう言って微笑む。それにリルは微笑み返し、背を向けた。

「アーシャル！」

リルは宿屋に帰り、勢いよく扉を開けた。中にはアーシャルが本を読んでいる。

「なに読んでるの？」

「……サルナルスの歴史書」

「うげえー。そんなもん良く読めるわね」

顔を顰めてリルは数歩後退した。その様子にアーシャルはため息を吐く。

「それで？ なにか俺に用があつたんじゃないのか？」

「あ！ そうだった……。あんた、今ここで起こってる無差別殺人事件知ってる？」

アーシャルはリルの言葉に目を見開いた。その様子に、リルは知らないとわかる。

「知らないのね……。私は今知ったんだけど。どうにも今日被害が出了らしいわ」

今回で6人目なのだという。一ヶ月前から度々あつたらしい。

被害者は全員男で、それ以外は共通点がない、と婦人達は話してい

た。

「でも、所詮は一般人の情報だから……。本当は共通点があるのか
もしれないわ。それと、殺し方が酷いらしいのよ」

なんでも、脇^{はらわたり}を裂いた後、首を切るらしい。

「悪魔の可能性が高いな……」

「そうよね。それに、あの警備兵……コウガも『最近悪魔関係の事
件が多い』て言つてたし」

リルは顎に手をあてて、口を開く。

「もう教会もとつぐに動いてるはずよね……。なのになんで未だに
悪魔を退治できていないのかしら?」

「追いつけないんだる?」

「は?」

アーシャルの答えに、リルは怪訝な顔をした。

「ここはアルディラルドじゃない。サルナルスだ。アルディラルド
ほど教会はでかくないし、人数も少ない。エクソシストなんて神官
よりもっと少ないだろう。最近、悪魔関係の事件が多いと言つてた
な?他の仕事もあって、追いつけないんだろう」

「まあ…… そうかもしれないけど……。それだつたら他国に協力し
てもらうとか」

「他国も他国で忙しいんだろうな。悪魔が強化されているから。と
ても協力を頼める状況じゃない」

もちろん、アルディラルドも。と言つてアーシャルはリルを一瞥
した。リルは顔を顰める。

「確かに…… そうね」

今この国も、他の国も忙しい原因は、私なんだ……
リルは拳を強く握りしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9748o/>

クロス・ローズ

2011年9月29日14時30分発行